

つながるための 「言葉」を獲得する

AIの発達により自動翻訳の技術が急激に進化しています。3ページのデータにもある通り、仕事で英語を使っている社会人への最新調査によると、多くの人々が「Google翻訳」や「ChatGPT」などの自動翻訳機能を業務に活用しているようです。

スマホ1台で簡単に他言語の翻訳ができてしまう今、語学を学ぶ意味や、キャリアへの活かし方について改めて考えてみたい。私たち編集部はそう思い、今回の特集を組むに至りました。

まずは言語に関するさまざまなデータからそのヒントを探ります。例えば、小学生のころは楽しく英語を学んでいた子でも、中学、高校と学年が上がるにつれて英語が好きではなくなってしまう傾向があります。その一方で、「英語で話すことが好き」と回答している社会人は、外国人とのコミュニケーションなど、人や世界とのつながりに魅力を感じているようです。

他言語を学び、新たな世界とつながった先に何があるのでしょうか。私たちと共に考えながら、ページをめくっていただけますと幸いです。

赤土豪一(本誌 編集長)

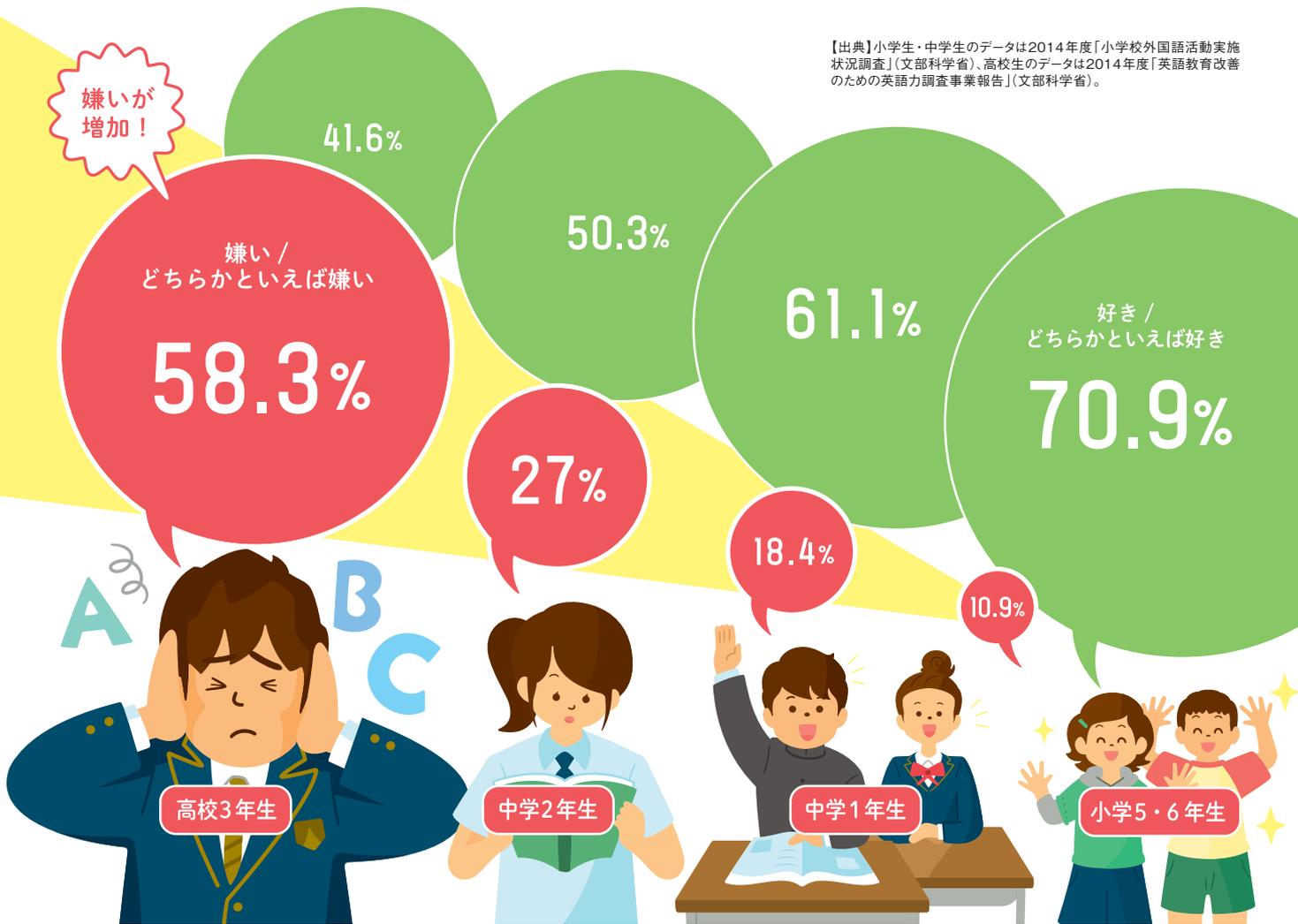
データで見る言語の「今」

人とつながるために不可欠なのが言語。
ここでは、話者人口が最も多い英語を中心に、
世界や日本国内の言語にまつわる状況や高校生の意識について、
データでひもときます。

構成・文／笹原風花 イラスト／フクイヒロシ

Q.あなたは英語が好きですか？

【出典】小学生・中学生のデータは2014年度「小学校外国語活動実施状況調査」(文部科学省)、高校生のデータは2014年度「英語教育改善のための英語力調査事業報告」(文部科学省)。

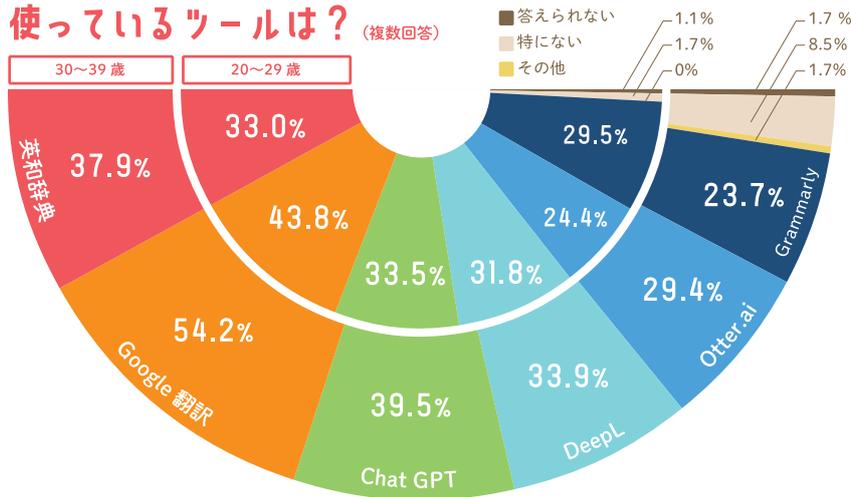


学年が上がるごとに英語が好きではなくなる子どもたち

「英語が好き・どちらかといえば好き」と答える児童・生徒の割合は、学年が上がるにつれて減少。逆に、「嫌い・どちらかといえば嫌い」という生徒の割合は増えている。遊び感覚で楽しく触れていた英語が試験などのために必要

な「勉強」になることで、嫌気が差してしまう子が少なくないようだ。英語を学んでも実際に使う機会が少ないことも、影響しているかもしれない。

Q.仕事で英語を使う際に使っているツールは？



【出典】2023年「ビジネスパーソン英語力実態調査」(Duolingo JAPAN)。

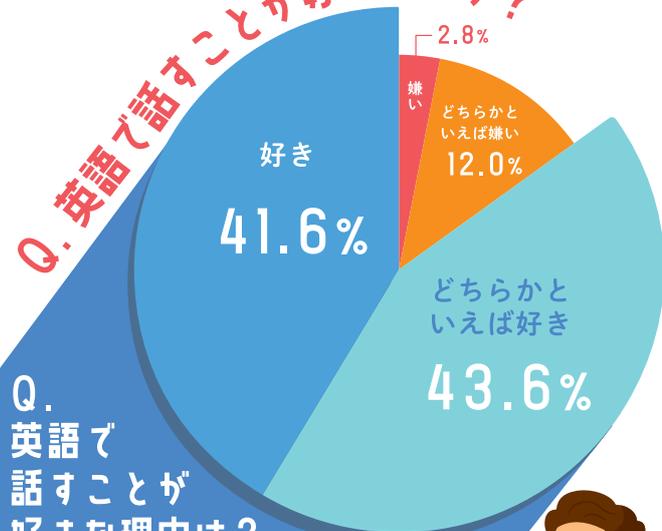
自動翻訳機能の活用が広がり、他言語理解のハードルが下がる

月に2回以上、仕事の実務で英語を使っているビジネスパーソンを対象にした調査を見ると、若い世代を中心に、多くの人々がGoogle 翻訳やChat GPT、DeepLなどの自動翻訳機能を活用していることがわかる。現時点では、AI翻訳は人間の英語力を補うアシスタント的な存在だが、機能がさらに進化した未来には、どうなるだろうか？ 他言語との壁がない世界が、待っているのだろうか？

英語を自ら学ぶ社会人は、人とつながる楽しさを実感

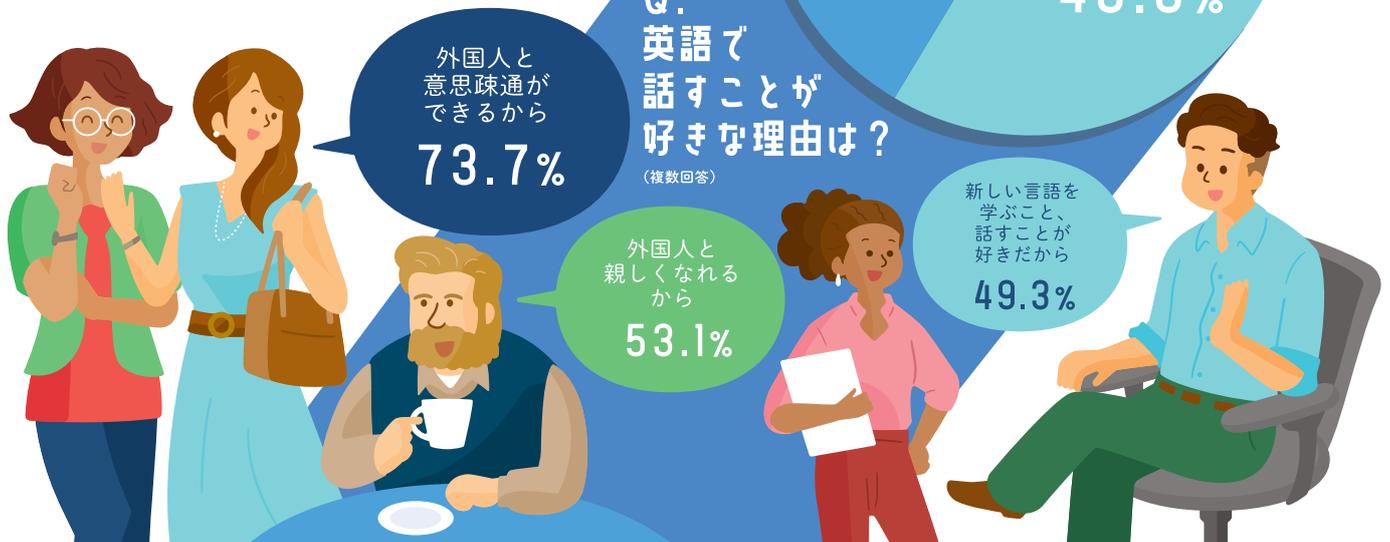
現在、英語学習をしているビジネスパーソンを対象にした調査では、85.2%が「英語を話すことが好き・どちらかといえば好き」と回答。英語で話すことが好きな理由として、ビジネスなどに役立つからというよりも、「外国人と意思疎通ができるから」「外国人と親しくなれるから」「新しい言語を学ぶこと、話すことが好きだから」という、人とつながることや世界が広がることの楽しさを挙げる人が多い。

Q. 英語で話すことが好きですか？



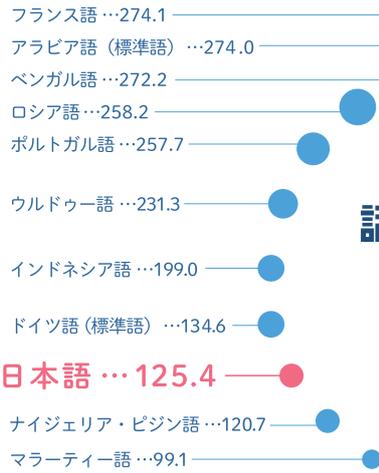
Q. 英語で話すことが好きな理由は？

(複数回答)



【出典】2020年「英語のスピーキングに関する実態と意識調査結果」(一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会)。

【出典】2023年「The most spoken languages worldwide in 2022」(satista)。



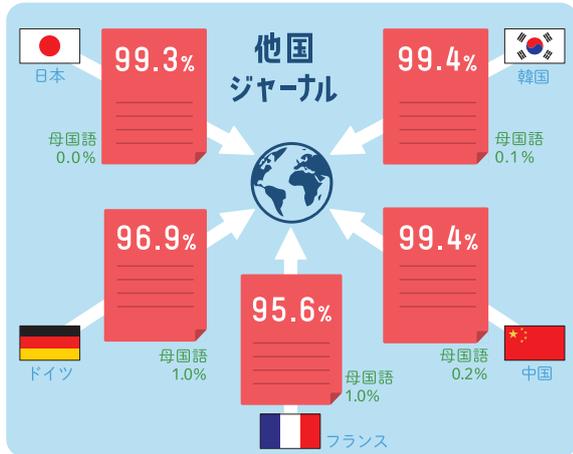
世界で最も話されている言語

単位: 100万人



論文の使用言語

■ 英語 ■ 母国語



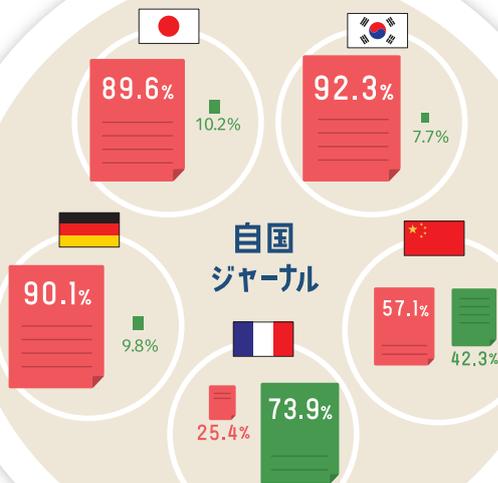
15億人が話す英語は、やっぱり世界の共通語!

世界で最も話されている言語は、やはり英語。非ネイティブ・スピーカーを含めて約15億人が英語を使っており、まさに世界の共通語となっている。2番目、3番目は人口の多い中国、インドの言語。4番目は中南米に話者の多いスペイン語。アメリカでは第2言語としてスペイン語を学ぶ人も多い。

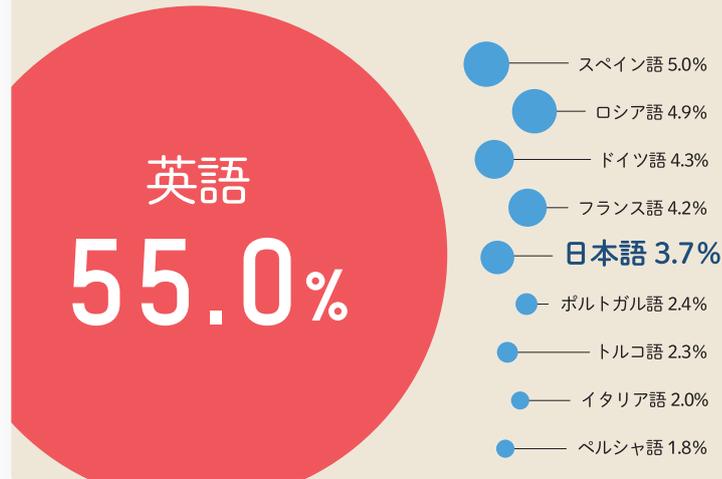
アカデミックな世界では、母国語だけでは通用しにくい

論文の使用言語を見ても、やはり英語で書かれるケースが多い。自国外のジャーナル (他国ジャーナル) に論文を掲載する場合は、ほとんど英語で書かれている。一方、国内のジャーナル (自国ジャーナル) に掲載する場合は母国語で書かれるケースもあるが、この場合は海外の研究者から引用されにくくなってしまふ。

【出典】2016年「ジャーナルに注目した主要国の論文発表の特徴 — オープンアクセス、出版国、使用言語の分析—」(科学技術・学術政策研究所)。



ウェブサイトにおいて最も使用されている言語

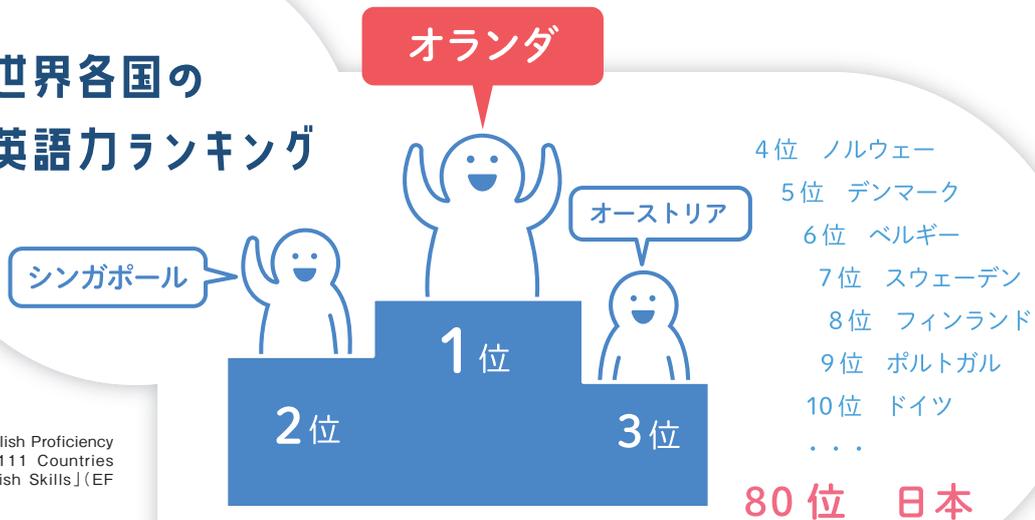


【出典】「Usage statistics of content languages for websites(2023年5月16日時点)」(W3Techs)。

日本語での検索では、 得られる情報が 限定的に!?

ウェブサイト上で最も使用されている言語も英語。実に全体の55.0%が英語による発信だ。日本語が使用されているサイトは全体の3.7%ほどにすぎず、日本語でインターネット検索をすると、さまざまな情報にアクセスしているようで、実は限定的な情報にしか触れられていないことがわかる。簡単な英語で検索し、出てきたページの内容をAI翻訳を使いながら読むなど、便利なツールを使いながら広く情報収集をしたいものだ。

世界各国の 英語力ランキング



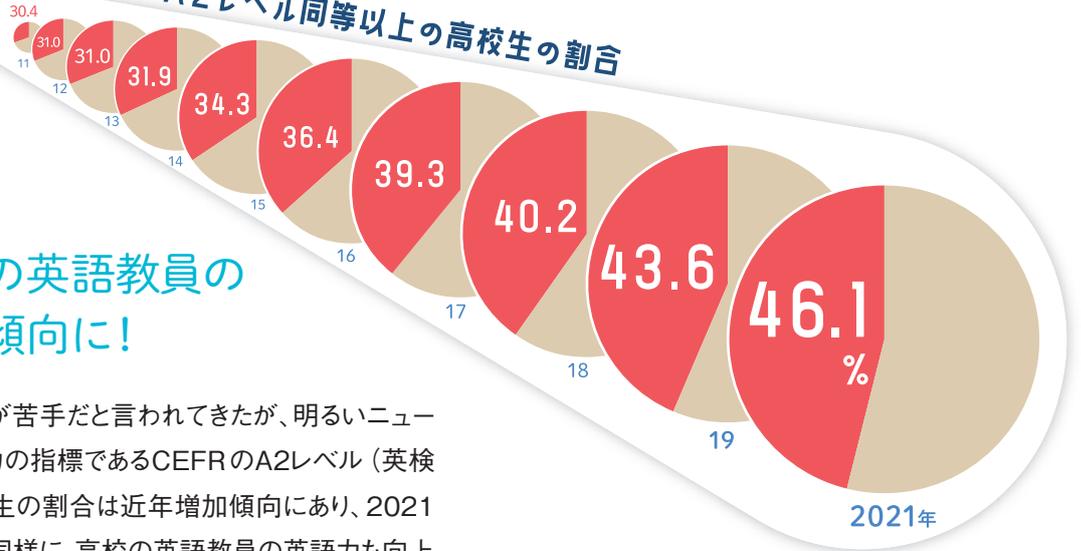
【出典】2022年「EF English Proficiency Index A Ranking of 111 Countries and Regions by English Skills」(EF Education First)。

ベスト10には北欧諸国がランクイン。 日本は英語力が低いカテゴリーに…

EF Education First社が実施する英語テストの受験者(約210万人)の分析からなる国別の英語力ランキングで、1位となったのがオランダ。ベスト10にはノルウェー、デンマーク、スウェーデン、フィンランドなど北欧の国々が並ぶ。一方、日本は80位で、英語力が「低い」カテゴリーに分類されるという残念な結果に。ちなみに、2位はシンガポール。教育熱が高まりを見せる、アジアの注目国だ。



CEFR A2レベル同等以上の高校生の割合



高校生&高校の英語教員の英語力は向上傾向に!

これまで日本人は英語が苦手だと言われてきたが、明るいニュースもある。国際的な英語力の指標であるCEFRのA2レベル（英検準2級）相当以上の高校生の割合は近年増加傾向にあり、2021年は46.1%となっている。同様に、高校の英語教員の英語力も向上（CEFR B2レベル以上を取得している割合が増加）傾向にある。

【出典】2021年度「英語教育実施状況調査」(文部科学省)。

世界で学習者の多い言語トップ5



日本で学習者の多い言語トップ5



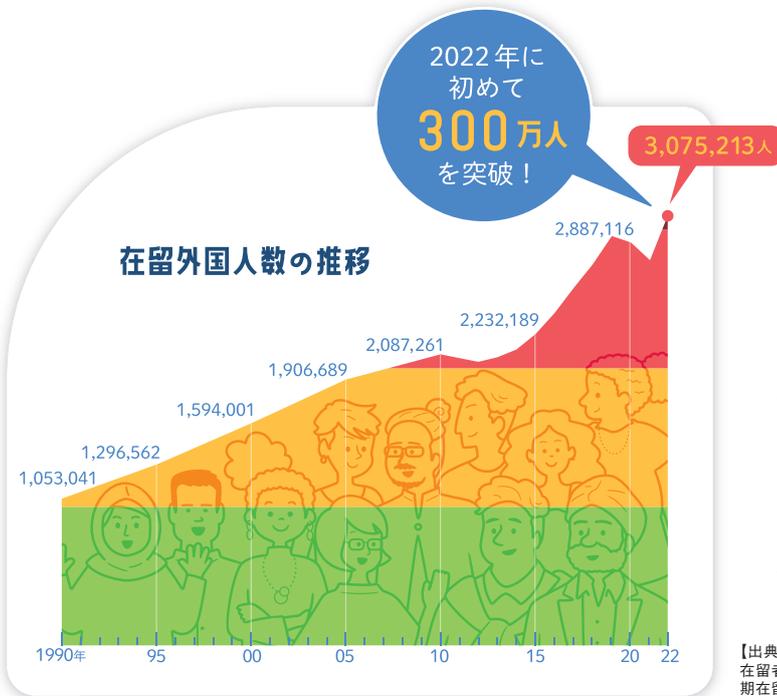
【出典】2022年「Duolingo Language Report 2022」[日本国内における語学学習に関する調査](いずれもDuolingo)。

日本語はアジアで人気。日本では韓国語を学ぶ人も多い

世界で最も学習者の多い言語は、英語。スペイン語、フランス語、ドイツ語、そして日本語と続く。日本語学習者が多いのは、中国、台湾、東南アジアなどの国や地域だ。日本で最も学習者の多い言語も、英語。韓国語が2位にな

る背景には、韓国ドラマやアーティストなどの影響がありそう。また、4位に日本語がランクインしているのは、海外から日本に来た留学生や旅行者、ビジネスパーソンが学んでいるからだと考えられる。





国内でも進むグローバル化。 在留外国人数が300万人に

日本国内に目を転じてみると、在留外国人の数は年々増加しており、2022年には300万人を突破。国内においてもグローバル化が進んでいると言える。在留外国人のうち外国人労働者数も増えており、普段の生活やビジネスシーンなどでも、日本語を母国語としない人の存在が身近になりつつある。

【出典】各年12月末時点の統計(法務省発表)。2011年までは、外国人登録者数のうち中長期在留者に該当し得る在留資格をもって在留する者及び特別永住者の数、2012年以降は、中長期在留者に特別永住者を加えた在留外国人の数。

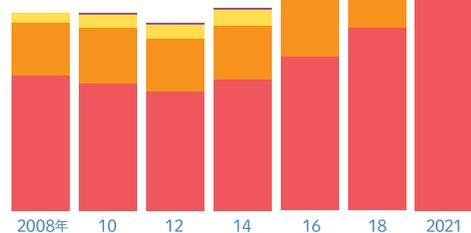
日本語指導が必要な 外国籍の子どもが増えている

日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数は近年増加しており、2021年は4万7,619人。小学生が多いが、中学生、高校生も増えている。地域により状況は異なり、都道府県別では愛知県が1万7,499人と最も多く、神奈川県、静岡県、東京都、大阪府と続く。なかには外国籍の生徒や保護者とのコミュニケーションが課題になっている学校もある。

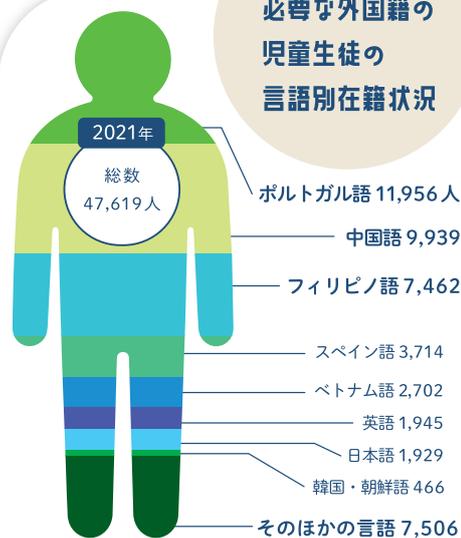


【出典】2021年度「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」(文部科学省)。

日本語指導が必要な 外国籍の児童生徒数



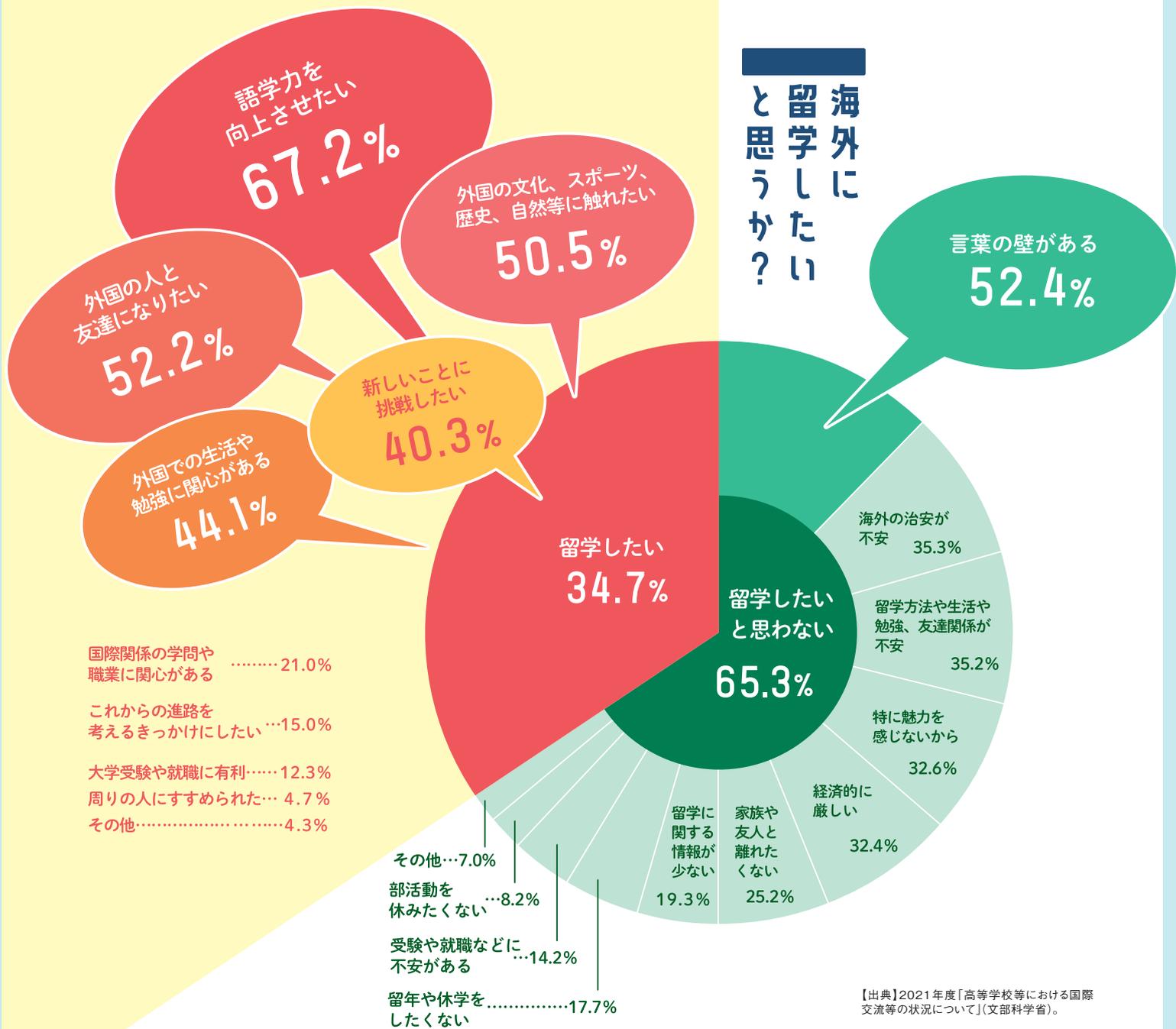
日本語指導が 必要な外国籍の 児童生徒の 言語別在籍状況



【出典】2021年度「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」(文部科学省)。

子どもたちの母語はさまざま。 日本でも多言語化が進む

日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の母語を見ると、最も多いのがポルトガル語で全体の約25%。これらの児童生徒の父母の多くは、ブラジルからの労働者であると考えられる。次いで多いのが中国語。さらに、フィリピン語、スペイン語、ベトナム語と続く。なお、日本語が母語かつ日本語指導が必要なケースには、海外からの帰国子女などが考えられる。



【出典】2021年度「高等学校等における国際交流等の状況について」(文部科学省)。

言葉の壁を乗り越えたい？ 言葉の壁があるからやめておく？

高校生を対象にした留学に対する意識調査では、海外に留学したい人は34.7%、留学したいと思わない人は65.3%となっている。留学したい理由(複数回答)で最も多いのが「語学力を向上させたい」である一方、したいと思わない理由で最も多いのが「言葉の壁がある」。壁があるからこそ挑戦するのか、壁があるから挑戦しないのか、考えさせられる結果だ。

英語ができるようになったら
何がしたい？ (複数回答)



【出典】2020年度「学習アンケート調査」(いっずな書店)より。

「言葉」は、新しい世界の扉を開くカギ

「英語ができるようになったら何がしたい?」という問いに対する高校3年生の回答を見ると、友達を作りたい、話してみたい、海外旅行に行ってみよう、海外で働きたいと、挑戦したいことがたくさんあることがわかる。「言葉」は、新しい

世界の扉を開くカギ。英語に限らず日本語以外の言語を獲得することで、新しい視点が得られ、つながりが生まれ、これまで知らなかった世界が開ける。言葉のもつ可能性にワクワクしながら、続く特集本編を読み進めていただきたい。



Interview

あの人が
他言語を
学ぶ理由



「言葉」のカギで開く扉、
その向こうにあるもの



他者や異なる文化を知る、
キャリアを広げる、選択肢を得る、
自分に気づく…。
他言語を習得することで
世界につながる「扉」を開けた人たちは、
扉の向こうに
どのような景色を見たのでしょうか。
異なる動機から他言語を学んだ
6名のストーリーをお届けします。



「あなた」をほんの少し知りたい。
その言葉を待っている人がいた



#学びのキッカケ

海外のお客様との会話を深められないことにジレンマを感じた。

#変化・気づき

「今日は何してた？」あなたを知りたい気持ちが伝わり、友達に。

#楽しさ・喜び

少し気になったことを聞いてみると、その人の素顔が見える瞬間。

バリスタ KIELO COFFEE 店長
鈴木美樹さん

専門学校でバリスタの技術を学び、卒業後はコーヒーの輸入・販売を行う会社に就職。2021年、「孤独の解消」をビジョンに掲げるKIELO COFFEE(秋葉原)に転職し、店長に。

「あと一步」が聞けない もどかしさが学びを後押し

もし私の仕事を「接客してコーヒーをお出しすること」だと考えるなら、わざわざ英語を学ぼうとは思わなかったかもしれません。スペシャルティコーヒーを提供するこのお店で働き始めたのは、2年前のこと。秋葉原に近い土地

柄、お店には海外からのお客様がたくさんいらっしゃいます。もともと英語は苦手でしたが、メニューを指差しながら最低限のやりとりをする程度なら私にもできました。

ところが、次第にジレンマを感じるようになりました。私たちのお店では、孤独を感じやすい社会のなかで、接客する側・される側のドライな関係を超えて、まるで友達のようなつな

取材・文／塚田智恵美 撮影／吉永智彦



KIELO COFFEEを訪れたお客様と。何気ない会話を楽しみに何度も訪れて、親しくなる方が多いという。会話からそれぞれに異なるバックボーンを知ると「海外からのお客様」とは一括りにできない」と鈴木さん(写真は本人提供)。

がりをお客様と築くことを目指しています。でも、あと一步コミュニケーションを深めたいところで、いつも言葉の壁が立ちはだかる。もし相手が友達なら「昨日はどこか観光に行った?」などと自然に聞かだるうに、その一言が出ない。たとえ聞けても、相手から返ってくる言葉が聞き取れないから、そのあとの会話が続きません。

お客様と友達になることを目指すのなら、「ちょっとした友達同士の会話」ができるくらいには英語を話せるようになりたい。そんな気持ちが芽生えたものの、初めのころは英語学習の本を買うだけで満足し、身につかない日々が続きました。そこで「明日からお店で使えるような、日常的な話し方や表現を学ぼう」と考え、英語圏のユーチューバーの雑談動画を見たり、「めっちゃ〜だね」「マジで?」など日常会話でよく出てくるような言い回しを学んだりす

ることに。覚えた表現をお店で使ってみて「これは伝わらないんだ」と学ぶことも。とにかく実践を重ねました。

学習本の外には英語の「正解」がたくさんある

せっかくの出会いをただ流すのではなく、2言、3言の会話のなかからでも“あなたという人間”を少し知ってみたい。そんな気持ちが、私の根っこにあったのかもしれません。英語という言葉を得ることで、海外の方とも一步踏み込んだ会話ができるようになりました。無難に接客をするだけなら必要のない、ちょっとした相手への興味——例えば漢字Tシャツを着ている方がいたら「なんでその漢字を選んだんだろう?」、日本のアニメのグッズを持っている方がいたら「この人、アニメが好きなのかな?」といったことを、聞けるようになった。す

ると、ちょっとした会話のラリーから、その人の素顔が見えるような瞬間があるのです。

そしてわかったのは、日本人と話したくて仕方がないとうずうずしている外国人がとても多いこと。シャイな人も多い日本人から街中で話しかけられることはほとんどなく、ホテルや観光地でも事務的な会話にとどまることが多いのでしょうか。だから、私が拙い英語で「今日は何してたの?」と“あなたについて”問いかけるだけで、待ってましたと言わんばかりの勢いで、お話をしてくれる方がたくさんいました。

お店のクチコミに、海外の方が「ここには英語で話せるミキがいるよ」と書いてくれたこともありました。私のような拙い英語で「話せる」と言っているのかしら、と照れましたが、たとえ片言でも「話そう」とする姿勢が伝わったのかもしれない。

気づいたら英語での会話が少しずつ続くようになって、日本に滞在している間は毎日お店におしゃべりしに来てくれる方や、一緒にご飯

を食べに行くほど仲良くなった方もいました。一歩深く関わろうと試行錯誤しているうちに、本当に「友達」になれたのです。

だいぶ英語を話せるようになってから、英語学習の本を改めて開いたとき、「注文するときの正しい英語はどれでしょう?」という問題を見つけました。選択肢を見て「あれ?」と思った。私は海外の方から毎日英語で注文を受けているのに、その問題の正解がわからなかったのです。むしろ、そこに書かれている選択肢はどれも、実際に使う表現とは微妙に異なるように見えました。考えてみれば、人によって、よく使う言葉や省略する言葉、訛りや言い方は異なるもの。人も、言葉も、それぞれ違って、生きている。学習本はあくまでも基礎であって、その外には人の数だけ英語の「正解」がたくさんある。そう思うと私は一層、さまざまな人と出会い、友達になることが面白く感じられるのです。





椎茸の海外市場を切り拓き
地元の生産者を笑顔に

#学びのキッカケ

海外の人に椎茸をPRするにあたり、英語の必要性を痛感。

#変化・気づき

商品の魅力を効果的に伝えられ、地元の活性化につながる。

#楽しさ・喜び

実践で試行錯誤するなかで、相手に響くキーワードが見えてくる。

椎茸問屋 (株)杉本商店 代表取締役社長
杉本和英さん

大学卒業後、関東でアパレル業に従事。2011年に宮崎県高千穂町に帰郷し、家業の椎茸問屋「杉本商店」に入る。現在、代表取締役社長。22年GFP(農林水産物・食品輸出プロジェクト)アンバサダー認定。

取材・文／藤崎雅子 撮影／姉川友香

生産者の暮らしを守るため 海外進出を決断

杉本商店は祖父の代から続く干し椎茸問屋です。地元の生産者さん約600件から、森林の中で原木栽培された良質な椎茸を買い取り、世界に販売しています。

海外進出を考え始めたのは2016年ごろ。国内需要が縮小するなか、同じ量を売り続けようとすると価格を下げるしかありません。しかし、それは絶対にやってはだめなんです。なぜなら、そうすると馴染みの生産者さんからの買い取り価格も下げざるを得ず、彼らの暮らしを守ることができなくなるからです。

1円でも高く買ってくれるところを見つけようと、目を向けたのが海外です。世界の人口

は増加しているから、いずれ食糧不足になり、安全で健康に良い食品は奪い合いになるのではないかと。そう仮説を立て、世界中の富裕層に買ってもらうと考えました。

コミュニケーションを広げる 英語の必要性を痛感

海外進出にあたってさまざまな施策を行ってきました。その一つは海外の食品展示会への出展です。現地には僕が行かざるを得ないんですが、僕の英語はひどいもので、平気で動詞を3つ並べちゃうレベル。まあそれでもなんとかなるんですよ。聞かれるのは椎茸のことだけで、誰も「国際情勢についてどう思うか」なんて聞いたりしませんから。

とはいえ、やっぱり英語は大事です。世界



インドの巨大市場をにらみ、在インド日本国大使館にて椎茸の魅力を伝える杉本さん（写真は杉本商店提供）。

中どこへ行っても英語は通じます。英語をその他の言語にする部分は自動翻訳に任せるにしても、まずは英語で伝えることができるだけで、コミュニケーションの対象は一気に広がります。

その重要性に40歳を過ぎて気づき、オンライン英会話スクールで勉強を始めました。最初のころは毎日レッスンを受け、苦戦していた文法の勉強には途中で見切りをつけました。実践ではぶっちゃけ文法なんてどうでもいいんですよ。ちゃんと伝えたいことがあれば、相手は聞く耳を立てて聞いてくれますから。それより、黙り込まないようにするのが大事です。使わないと言葉が出てこなくなるので、今も週一ペースでレッスンを続けています。

刺さる言葉でつなく 「驚き」と「感動」が心を動かす

相変わらず今もひどい英語です。それでも、自分たちの商品は、自分たちで伝えなければと思っています。重要なのは、英語を話すことではなく、何を伝えるかという本質。ガチャガチャな文法だけど、一生懸命話していると、商品の魅力は伝わるんです。通訳を介したら、たぶん半分ぐらいしか伝わらないでしょうね。

今の時代、人の心を動かすには、「驚き」と「感動」しかないと思います。僕は年に何回も、

アメリカやドバイ、インドなど海外の展示会やイベントに行きますが、いつも椎茸のかぶり物を着用します。周りのブースでは雛壇に商品をきれいに陳列しているなか、うちは椎茸栽培する光景の写真がドーンとあって、その前に椎茸を被った僕が立っている。みんな立ち止まって写真を撮りだします。そこですかさず椎茸を試食してもらおうと、「わあすごい」「こんなものがあったのか!」といとも簡単にお財布を開けるんですよ。つまり、かぶり物は「驚き」、試食の椎茸は「感動」を与えるんです。

その「驚き」と「感動」をつなぐのが、「言葉」ではないでしょうか。最初はどう説明するといいかわからないんですが、トライ&エラーを繰り返すなかで、やけに“刺さる”キーワードが出てくるんです。例えば、椎茸の英語表現は「Japanese shiitake mushroom」から「forest - grown mushroom」に変えました。森林で育った椎茸の魅力が、ストーリーとして刺さることを現場で感じたからです。

今、21カ国に輸出するようになりました。国内の落ち込みを海外で補い、生産者さんから変わらず買い取ることができています。生産者さんは「そうか、俺が作った椎茸が海を渡ったか」とめっちゃくちゃ喜んでくれています。今後も「安心して生産してくださいね」と言っていきたいですね。

#学びのキッカケ

日本語圏にとどまっていたのはキャリアが頭打ちになるとの危機感。

#変化・気づき

共通言語をもつだけでは不足。伝える努力の大切さを痛感。

#楽しさ・喜び

キャリアの選択の幅が広がり、安心感につながった。

将来の危機感から英語環境に突入。
相手の意を汲む努力こそ大切と知る

エンジニア (株)マネーフォワード 西村由佳里さん

小学生のころ自作PCに夢中になりエンジニアの道へ。2019年、家計簿アプリなどを手がける(株)マネーフォワードに転職。21年、職場の完全英語化を先行実施するチームへ異動。現在も英語環境で活躍中。

日本語圏でのキャリアへの 閉塞感から英語漬けの環境へ

日本のウェブサービス会社でエンジニアをしています。チームの公用語は英語で、多くの海外出身者と共に働いています。

私は日本生まれ日本育ち。学生時代は英語が得意でなく、特に興味もありませんでした。意識が変わったのは、転職活動でいろいろ企業研究をしたとき。長く活躍している女性エンジニアの多くが外資系企業在籍であると気づき、「女性として、

このまま日本語圏にとどまっていたら私のキャリアはいつか頭打ちになるかもしれない」との危機感から、英語の勉強を始めました。ただし転職後、「女性として」という考えは打ち消されることに…。

転職先である今の会社は、会社の急成長によってエンジニア不足が深刻化するなか、早くからベトナム人を「日本語を話せる」という条件で採用していました。21年には「日本語」の条件を撤廃し、世界中からの人材獲得に乗り出しています。それに伴い、24年度中の開発部門全体の公用語英語化を掲げ、英語化実践組織を段階的に

取材・文／藤崎雅子 撮影／吉永智彦

広げている最中。

うちの会社に限らず、海外採用の拡大によって多様な国籍の人がチームとなる職場は増えていくでしょう。もはや男女関係なく、これからのエンジニアには英語力が必要なのでは。そう考え、英語の勉強に一層力が入るようになりました。

21年秋、英語化の第一歩として先行実施チームが発足することになり、「チャンス!」と飛びつきました。それまでも英語を使う仕事は積極的に取りにいていましたが、より厳しい環境で自分を鍛えたいと思ったからです。

会議はもちろん、相談やチャットのやりとりなど、仕事上のコミュニケーションはほぼ英語だけ。そこで経験を積んできたことは、キャリアに対する安心感に。定年まで同じ会社とは限らない時代、未来の選択の幅が確実に広がった思いです。

平易な英語でいい。 正確さより、伝える努力が必要

誤解しないでほしいのですが、私たちは職場で、ネイティブのような流暢さや、美しい表現が求められているわけではありません。社内で推奨されているのは、シンプルな英語「グロービッシュ」。海外にも英語を第一言語としない人は多いので、必要なことを平易な表現でわかりやすく伝えること



同じチームで働くベトナム人のエンジニアと。「非ネイティブ同士が意思疎通するための英語として、発音や文法の正しさは重要ではない」

が重要なのです。

最近、中高生時代の愛読書『十二国記』*の中に、何度も読み返すシーンがあります。言葉の通じない国に迷い込んだ少女が魔法のような力で言葉を獲得したとき、こんな忠告を受けます。「言葉が通じるからといって、互いの考えていることが分かるというものでもない」「必要なのは相手の意を汲む努力をすること」。当時はこの意味がわからなかったのですが、今ならわかります。

例え翻訳ツールで正確な文章が作れても、相手の知識や求めを踏まえて伝える努力をしないと、伝わらない。今後もそれを忘れずにコミュニケーションしていきたいです。

*『十二国記』小野不由美／新潮社

モロッコから有馬へ。

それは言葉を通じて「私」を知る旅

#学びのキッカケ

「芸者とTOKYO」日本の魅力や不思議に惹かれて、19歳で留学。

#変化・気づき

正確さより、アイデアを伝えたい気持ちを優先したら伝わるように。

#楽しさ・喜び

言語を通じてその国の文化に触れ、新たな自分らしさを獲得する。

ブランドディレクター 有馬温泉 御所別荘
らみや
金井良宮さん

1999年来日。スキンケアの海外戦略、商品企画等を経て、2011年に有馬温泉最古の宿、御所坊のブランドマネージャー兼若女将に。現在は系列旅館の御所別荘でブランドディレクター兼女将を担う。

「いいです」は「要らないです」?

北アフリカ・モロッコで生まれ、19歳のときに日本に留学しました。土地や資源も少ないのに、経済大国の日本。芸者や侍、忍者といった伝統的な文化がある一方で、東京などの都市は現代的で洗練されているのに興味をもちました。留学して最初の1年は大阪で日本語や日本文化を学び、その後、神戸大学工学部に入学しました。留学生の私に話しかけてくれる人はほとん

どおらず、同じ学部の女性たちに「友達になりませんか」と手紙を書いていったのを覚えています。もともと学んでいた英語も使いながら交流し、仲良くなりました。

日本語は難しいです。単語の意味がわかっても、その時々雰囲気や行間で、意味が変わる。例えば笑顔で手を振って「いいです」と言った場合、「いい」だから「OK」と思ったら、実際には真逆の「要らない」という意味だった、といったことも。だから、ひたすら周りの人を観察する日々でした。

大学で仲良くなったグループの1人に、有馬温泉最古の温泉旅館に生まれた金井一篤さんがいて、大学1年のときにみんなで有馬のお祭りに行きました。歴史の深い街ですが、有馬は街の人たちがフラットで、「日本の魅力はこういうもの」「外国人はこれが好き」と一括りにしないことに魅力を感じたのを覚えています。

のちに一篤さんと結婚。東京の企業で働いた後、フランスの大学でMBA資格を得て、有馬温泉で働くようになりました。

伝えたいことがあるのに 我慢しては「申し訳ない」

東京の企業に勤めたときも、有馬温泉で義父



海外に向けて、有馬の歴史や文化を発信することも。写真は2016年、イタリアで行われたスローフードの世界大会での様子(本人提供)。

の通訳をしたときも、私は歯がゆさを感じていました。「外」から来た私には、長く同じ場所にいる人とは異なる視点から、そこにあるものの良さが見えることがあります。それで何かアイデアを思いついても、日本語が上手ではないので伝えられないのです。「せっかく私の中に生まれて、外に出ていこうとしているのに、言葉のせいで私の中に閉じ込めてしまうのはアイデアに申し訳ない」。そんな葛藤がある日爆発し、積極的に相手に喋るように。すると、言葉は拙くても思いは伝わったのです。大事なのはメッセージなのだと感じました。

幼少期に習得した言語を通じて、自分の国や文化の中で「私」というものを捉えていたけれど、英語を学ぶことによって自由を獲得し、自分の意見を主張するようになりました。そして日本語を通じて、相手を敬う姿勢や、はっきり表に出ない感情を読み取ろうとする思いやりを知った。言語を学ぶとは、自分のアイデンティティを拡張すること。「これが私」と思っていたものが、別の価値観や文化と巡り合ってどんどん広がっていく。他の言葉を獲得する道のりは、同時に「私」を知る旅だったのでしょう。

「リスぺクト」は国境を越える
全力で戦ってこそ生まれる絆。

©2023 Riot Games, Inc. Used With Permission

#学びのキッカケ

洋楽が好き。またゲームに関して英語による情報が多かったから。

#変化・気づき

国際大会で海外チームのコーチと雑談し、情報を得られるように。

#楽しさ・喜び

憧れの選手やコーチと交流し、リスぺクトの気持ちを伝えられる。

eスポーツ コーチ ZETA DIVISION
XQQさん

選手として活躍後、21歳で専任コーチに転身。日本のeスポーツ界ではゲーミングコーチのパイオニア的存在で多くの支持を集める。所属するZETA DIVISIONではヘッドコーチを務め、チームを世界大会に導く。

ゲームで勝つには 英語でも情報を得なければ

近年は、職業としてeスポーツ選手(プログラマー)を選択する人も増えています。私も18歳からプロの世界に飛び込み、数々の世界大会に出場してきました。世界との差を考えて、専門職としてのコーチが日本にも必要だと感じ、21歳でコーチに転身しました。

世界のeスポーツ市場は、北アメリカや韓国・中国がリードしています。おのずと世界に出回る

ゲーム関連の情報も、他言語が多いです。翻訳サイトやアプリを活用しながら情報収集していますが、自分に知識がないと、翻訳された情報が本当に正しいのか、判断できません。

もともと洋楽が好きで、英語への憧れもあったため、語学アプリなどを使って英語を学ぶように。ただ、ゲームを通じて会話する場合は、片言でも案外伝わるとわかりました。そもそもプレイヤーには英語が第一言語ではない人も多く、ゲームでよく使う単語や言い回しを覚えてしまえば、文法はめちゃくちゃでも通じるのです。

取材・文 / 塚田智恵美

むしろ英語を学ぶ過程で衝撃だったのは、世界大会に出場したとき、会場近くのカフェに行つて「テイクアウト」が通じなかったこと。英語圏では持ち帰りしたいとき「トゥーゴー」が一般的なんです。海外遠征で、現地の人と直に触れ合うことで実践的な知識を得ていきました。

憧れの人とは自分の言葉で 直に熱量を交換したい

先日も、世界大会に出場するために韓国に行きました。eスポーツは情報戦の面も大きく、他国の選手やコーチと交わした何気ない会話から、ゲームにまつわる最新情報やその国ならではの戦い方を知って、チームの戦略に生かすこともあります。かしまらない雑談を通じて得られる情報は意外と多く、コーチとして英語を学んだことはプラスだったと思います。

ただ、言葉を通じて交換するのは、情報だけではありません。eスポーツの国際大会では、試合のあと相手チームの選手やコーチに自ら話しかけに行く人たちの姿を見かけます。時には、憧れの選手とユニフォームを交換する場面も。サッカーや野球の国際大会と同じで、真剣に戦うからこそ相手をリスペクトする気持ちが生まれる。

強い選手と話せたら嬉しいし、やる気も出る。情報交換に限るなら、精度が高ければ翻訳でもいい。でも熱量の交換は、自分の言葉でできたら嬉しいじゃないですか。

フィジカルスポーツと同じように、ゲームも、真剣に取り組むことでさまざまなことを学べるものです。スポーツマンシップや戦略的思考…。その一つに、私の場合は「英語」があったのだと思います。いつか日本が、eスポーツで圧倒的な力をもつ日が訪れて「日本語を学ばないと最新の情報に追いつけないな!」とも言われてみたいですね。



2023年5月に世界大会に出場したときの1シーン。チームをまとめ上げながらも、他国のチームの戦い方を見て、俯瞰して戦略を立てる。

#学びのキッカケ

大学時代、消去法でなんとなく中国語を専攻。

#変化・気づき

いろんな人とつながり、自分の世界が拡大。仕事にも役立った。

#楽しさ・喜び

苦手を克服したことで自信がつき、積極性が増した。

中国語との出会いは
自分の新たな一面を知る機会・勇気に

公務員 大分県庁
佐田彩歌さん

愛媛大学の学生時代に中国語と出会う。中国文学のゼミに所属し、中国留学も経験。2021年4月に大分県庁に入庁し、約2年間、観光誘致促進室の事務職員として東アジアを担当。現在は地域創生部主事。

「英語がダメなら中国語!」 中国の魅力を知り夢中に

高校時代から「海外に行ってみたい、海外の人と交流したい」という思いがありました。でも、英語は苦手で、成績も下のほう。なので大学進学後、「英語がダメなら中国語かな」という安易な考えで、話者人口の多い中国語を第2外国語として選択し、学び始めたんです。

中国文学のゼミに入ったことで、中国人留学生と知り合う機会にも恵まれました。彼らと話し

てみたらめっちゃ楽しくて、「こんなに面白い国があるんだ!」と中国への興味が大きくなり、中国語の勉強にも熱が入りました。勉強方法は、留学生とおしゃべりしたり、中国のドラマやネット動画を見たり。趣味の延長のように、自分のペースで勉強することが私には合うようです。

大学3年生のとき、中国留学にも踏み切りました。それには当時目指していた教職課程の履修を諦める必要がありましたが、中国への好奇心と、想像がつかない世界に飛び込んでみたい気持ちが強くなり、留学のほうを選びました。

現地を生で感じ、ますます中国が好きに。どこが好きかというと、整然としていないごちゃごちゃ感と、あふれるエネルギーでしょうか。最初は「えっ」と驚くこともありますが、その雑さが心地良いんです。私は周りの目を気にしてしまうタイプですが、中国には多少のことでは動じない自分をもつ方ばかり。私もやりたいことをしていいんだ!と思えます。

仕事相手との関係性が言語力によって親密に

こうして中国語を学んだ経験は、仕事にも活かしています。

私は県庁に入庁して約2年間、観光誘致促



中国留学中に中国語の授業で使っていたテキストには書き込みがたくさん(写真は本人提供)。

進室で東アジアを担当し、中国や韓国の旅行会社、メディアに向けて観光客誘致を働きかける仕事をしました。海外の方とのやりとりでは、先方の担当者が日本語を話せることがほとんどであるため、こちらは先方の言語が話せなくても問題ありません。ただ、少しでも言葉を話せると、先方の心の開き方が違うと感じます。

仕事の話が終わったあと、なるべく個人的に先方の言語で話しかけ、趣味の話をしたり、相手の国が好きだという気持ちや好きになったきっかけを伝えたりしていました。すると、親密さが生まれ、その後も気軽に情報交換や相談がしやすくなります。そんな関係性が築けたのも、言葉というコミュニケーション手段をもっていたからこそでしょう。

改めて振り返ってみると、苦手意識のあった外国語のなかに好きな言語ができ、勉強すれば上達できると知ったことは、大きな自信になりました。だからこそ留学を決断でき、そこでの経験が仕事にも活かしたし、これからのキャリアの広がりにもつながると思います。私にとって他言語は、世界を広げる手段。日本語だけの中に閉じこもっていたら絶対得られなかった世界を、今、楽しんでいます。

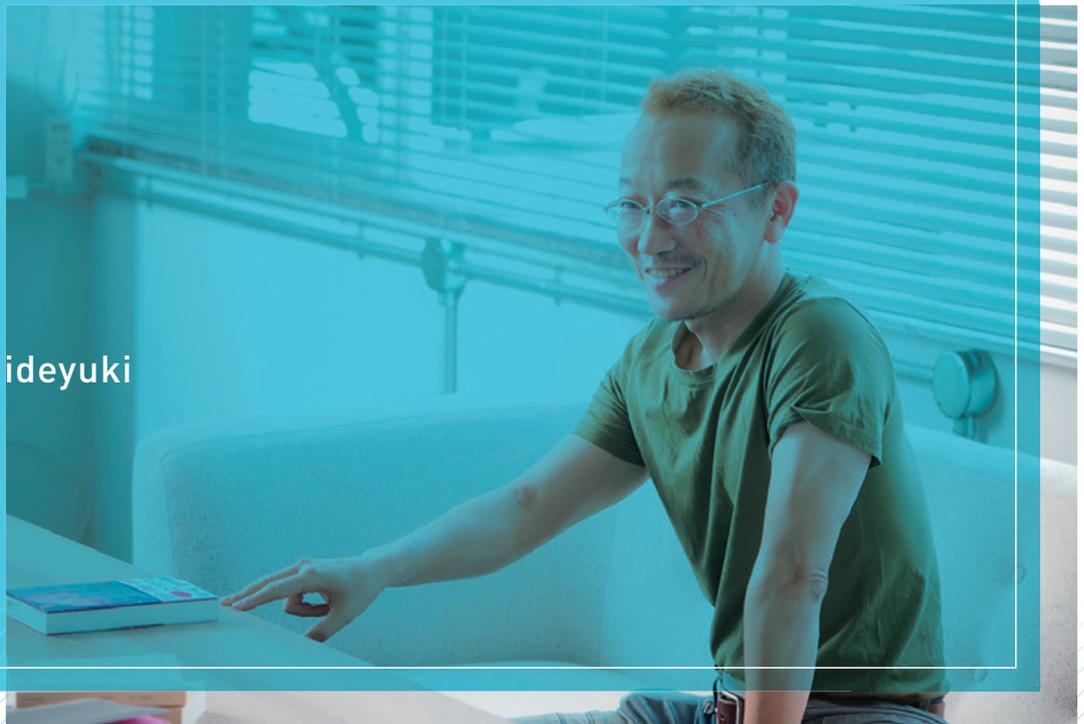


Matsumoto Shigeru

他言語が紡ぐ 「世界とのつながり」

言語の本質とは、語学がもたらすものは何か。

NHK英会話番組の講師を長く務め、コミュニケーション教育の専門家である松本 茂教授と
25の言語を駆使し世界の辺境を巡るノンフィクション作家の高野秀行さんに伺いました。



Takano Hideyuki



東京国際大学
言語コミュニケーション学部 教授
松本 茂さん

まつもと・しげる ● 1955年生まれ。専門はコミュニケーション教育学。マサチューセッツ大学ディベートコーチ、東海大学教授、立教大学教授(現名誉教授)などを経て2021年4月より現職。『おとなの基礎英語』ほかNHK番組(Eテレ、ラジオ)への出演多数。現在「中学生の基礎英語レベル2」講師。全国高校英語ディベート連盟(HEnDA)副理事長。東京都英語村(TGG)プログラム監修者。

PART1

言語によって思考は深まり、 人と人との関係は築かれる

コミュニケーションとは そこに「ある」もの

よく、「英語はあくまでツール」と言われます。「大切なのは、英語を使って何をするか」ということなのはわかりますが、個人的には少し引かかるフレーズです。言語とは単なる道具やスキルではなく、もっと奥深いもの。思考や感情を紡ぎ、人と人との絆を深めるものだと考えているからです。

実際、外国語に触れると、日本人同士の会話では発想し得ないことも含め、さまざまな

意見に出合います。特に英語は、話者の数も人種も多く、発信される情報量が桁違いであるため、多種多様な側面から物事に触れることになり、思考を深めることができます。これが私が思う、言語を学ぶ一つ目の意義です。

もう一つの意義は、他者との関係性を築き、つながるために必要な媒介だということです。

それについて述べる前に、「つながる」とはどういうことか、私の専門であるコミュニケーション学の立場から補足させてください。コミュニケーションとは「とる」ものではなく、「ある」もの、という捉え方です。

取材・文／堀水潤一 撮影／丸山 光

例えば、私の講義中、前の席に座る学生は熱心に耳を傾け、ときおり質問もする一方、後ろの席の学生はスマホをいじっているとします。そのとき私は前の席の学生とだけつながっているかといえば、そんなことはありません。後ろの席の学生も、スマホを使うという行為を通して「授業内容が難しすぎかな」「やめるよう注意すべきかな」と私に考えさせるなど、影響を与えているからです。つまり、ある空間を誰かと共有している限り、意識的・無意識的にかかわらず、また浅い・深いという程度の差はあっても、そこに関係性は存在しているのです。

その意味では、あなたが外国人と場を共有した際、英語が苦手という理由で、うつ向いては、関係性が深まらないどころか、本心とは異なるメッセージを相手に与えかねません。

反対に、「言葉」を介すことで、人と人は、より深い関係性を築くことができます。英語で繊細なニュアンスまで伝えられるようになり、「これを言ったら失礼になる」といったことまでわかってくると、異なる文化をもつ人間同士でも、関係はより深まっていくでしょう。

もちろん、母語ではないため、英語で会話をすると、言いたいことがうまく伝えられないも

どかしさも感じます。そうした感覚は、反対の立場に置かれた人に思いをはせることにもつながります。来日して日が浅い留学生はもちろん、日本に定住しながらも日本語を不自由にしている人は大勢います。そうした人たちが日々感じている、言いたいことをうまく表現できない辛さは、英語でうまく意思を伝えられない辛さと同じはずです。

趣味から始める英会話 英語ディベートにも期待

「つながり」という点で言えば、ICTの普及によって世界中の人とつながることが可能になりました。私の趣味は釣りですが、日本にいなながらYouTubeにアップされる世界中の釣り動画を楽しんでいますし、SNSを通じて米国の釣り仲間とも交流しています。英会話の学習も、趣味から入るといいでしょう。野球好きならばメジャーリーグのサイトを閲覧するなど、好きなことや得意なことから始めてみる。専門的な知識があるため、わからない言葉が出てきても類推できますし、何より、楽しみながら学べます。その際、頭の中で日本語に訳さず、英語を英語のまま理解し、話すことに慣れる



国際色豊かな東京国際大学キャンパス(埼玉県川越市)には、留学生の出身国の国旗が並ぶ。

ことが上達への近道です。

学校の授業に関して言えば、大切なのは、教室の中に「学び合う関係性」がつけられていること。「この先生になら、言いたいことを言える」「この仲間に対してならば発言できる」という信頼関係があり、安心して自己開示 (self-disclosure) できることが、会話を伴う学習には欠かせません。

そうした環境がある前提でお勧めしたいのは、4技能5領域を統合した学習でもある「ディベート」です。よく「うちの生徒に英語でのディベートなんて無理」と言われますが、学習指導要領で同じく明示されている「ディスカッション」よりも易しいと思います。ディスカッションは、みんなの前で自分の意見を表明しなくてはいけないため、多感な時期にある高校生にはハードルが高いかもしれません。一方、ディベートでは、自分の考えをさらけ出す必要はありませんし、論題が与えられるうえ、肯定側・否定側と立場が決まっているので気が楽です。

本心では否定側の立場であると感じている論題に、敢えて肯定側の立場で考えることで、これまでなかったモノの見方ができ、新しい自分に気づくこともあるでしょう。

論題も、初めのうちは「制服廃止」など軽めのもので十分です。安楽死合法化や死刑廃止など、生徒によっては難解で関心をもてないテーマを選んでしまうと失敗の素。とはいえ、ディベートには話す内容に関する理解が求められるため、他教科の学びにもつながります。結局のところ、英文が理解できるかどうかは、内容についてある程度の知識があるかどうか

との関係性が強いと思います。本を読み、時事ニュースに触れ、人の話を聞くことで、物事を多面的に考えられるようになるし、読解力も高まります。他教科で学ぶことすべてが生きているのが英語の時間です。英語を中心としたクロスカリキュラムができる可能性もあるでしょう。

多様であることを知り、 同じであることも知る

人間らしい豊かな知的活動をするためには、他者との関わりが欠かせません。日本語しかできない人と比べ、外国語を操ることができる人は、さまざまな情報や考え方を吸収しやすくなり、世界観が広がります。

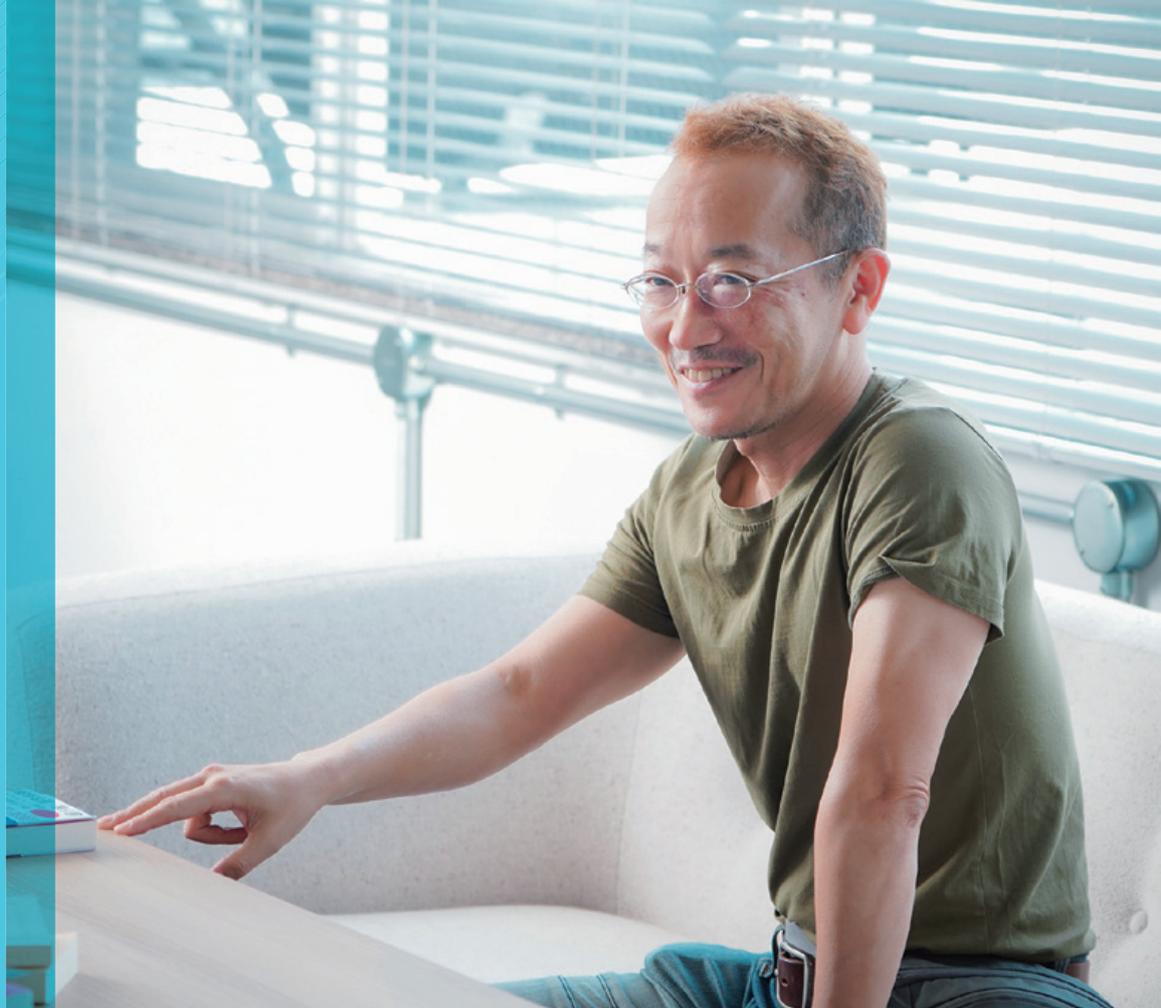
世界の広さを知る一方で、人はそんなには変わらないことも実感するはずです。几帳面な人もいるし、いい加減な人もいる。良い人もいれば、嘘つきもいる。世界のどこでも同じです。

表面的には異なる国民性に見えても、根っこは一緒であることにも気づくでしょう。例えば、日本人が海外に駐在する場合、家族を残して単身赴任するケースが多いですが、現地の方は「なぜ家族を連れてこないんだ。愛していないのか」と不思議がります。でも、子育てや受験のことを考えると日本に残した方が子どもの幸せになると判断しているケースもあります。

家族を愛しているからこそ、片や一緒に暮らすし、片や離れる選択をする。そうした背景まで含め、きちんと説明できる力があれば、人はもっとわかり合えるし、関係性はより深まっていくことでしょう。

ノンフィクション作家 高野秀行さん

たかの・ひでゆき ● 1966年生まれ。早稲田大学探検部在籍時に書いた『幻獣ムベンベを追え』（集英社文庫）で作家デビュー。「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白おかしく書く」がモットー。タイ国立チェンマイ大学日本語科、上智大学外国語学部での講師経験も。『謎の独立国家ソマリランド』（集英社文庫）で講談社ノンフィクション賞受賞。7月に新刊『イラク水滸伝』（文藝春秋）を出版。



PART2

情報を伝えるための言語と 親しくなるための言語

言語の二刀流に目覚めた 私の“語学ビッグバン”

学生時代、ムベンベという幻の怪獣を探しにコンゴの奥地の村に滞在しました。その時です。私の中で“語学ビッグバン”というべき現象が起きたのは。

今でこそ「学んだ言語は25以上！ 辺境ノンフィクション作家の超下級語学体験記」と帯で謳われた書籍『語学の天才まで1億光年』を出版するほどの言語マニアの私ですが、中高時代の英語は他教科同様、義務的に学習

していただけ。ただ、雑誌『ムー』を愛読し、世界中を探検するという目標がありましたから、語学の必要性は感じていました。

念願叶って大学の探検部に所属したものの、私には特技や経験が何もありません。せめて片言の外国語くらいは話そうと思いました。そのためコンゴ遠征の際は、公用語の仏語に加え、現地で使われるリンガラ語を習得して臨みました。すると、現地の人たちに思いのほかウケたんです。それまで各地で、英語や仏語を話しても反応は薄かったのに、そこでは簡単な会話をしただけで目を輝かせてもらえるこ

取材・文／堀水潤一 撮影／吉永智彦



とに、感じたことのない快感を覚えました。

そして確信します。言語には、「情報を伝えるための言語」と「親しくなるための言語」の二種類があると。この二つが備われれば最強です。語学の二刀流を使いこなす喜びを知り、私の言語宇宙は一気に膨張することになりました。世界中どこに行くにしても、現地の言葉をゼロから学ぶ習慣がついたのです。

私のこの体験を基に、「将来、外国で仕事をする際は、英語だけではなく現地語を学ぶといいですよ」と勧めるのは簡単ですが、英語を学ぶだけで精いっぱい的高校生には荷が重いかもしれません。なので、こう考えてみてください。一つの言語の中にも、先ほどの二つの側面があると。例えば、機械翻訳の精度がいくら高まってもAIでできるのは「情報を伝えるための言語」の役割まで。通訳を通じた会話にも似て、デジタルを介したところで、相手と心が通じ合うまではいかないでしょう。

わかりやすい例がシリコンバレーです。なぜ多くのスタートアップがわざわざ集うのか。ICTのエキスパートなんだから場所を選ばずともいいじゃないですか。そうしないのは、同じ空間を共有し、無駄話や軽口など、どうでもいいことを話すことで関係性を築いているからだと思うんです。その際、共通語として使われることが多いのが英語であり、だからこそAI時代においても英語を学ぶ意味はなくならないと思います。

語学力の半分は 相手に委ねられている

語学ビックバンに先立ち、私の語学観を変

える、ちょっとした出来事がありました。自動車教習所の講義で教官がこう話してくれたんです。「皆さん、路上での運転が不安だと思いますが、大丈夫です。他のドライバーは皆さんより上手ですから、ぶつかりそうになったらよけてくれます」と。心が軽くなったとともに、外国語の会話も同じだと感じました。コミュニケーションは共同作業。こちらがたどたどしくても、相手がうまければきっと助けてくれる。そうでないと会話が成立せず、向こうも困りますから。

英会話講師を長く勤める知り合いのアメリカ人は、「ほとんどの日本人と英語で会話できる」と自慢げに話していました。相手の英語が下手でも、こちらがスピードを緩めたり、言い回しを変えたりすることで会話が成り立つと言うのです。ということは、そのアメリカ人ががんばることで、ほとんどの日本人は英語を話せることになるじゃないですか。では語学力って何なのか、という話になりますよね。個人の中にある“絶対的語学力”は、せいぜい半分ぐらいで、残りは、相手側にも左右される相対的なものだと思っています。

ネイティブと非ネイティブ、 グローバル英語を話すのは？

そういう私も、ネイティブの話す英語は聞き取れないことが多いんです。けれど、非ネイティブの話す英語に問題を感じたことはあまりありません。

同様のことを語る非ネイティブは大勢います。知人の作家に聞いた話ですが、約40カ国の文学者がアメリカの地方に集まり、数カ月共

同で創作活動をしたそうです。全員が非ネイティブで共通語は英語。それで問題なかったのに、たまに現地のアメリカ人と交流するとき、その人の話す英語がみんなよく理解できなかったとか。非ネイティブ同士は意思疎通できるのに、ネイティブとだけはできない。こうなると、ますます語学力ってなんだと思ってしまいます。

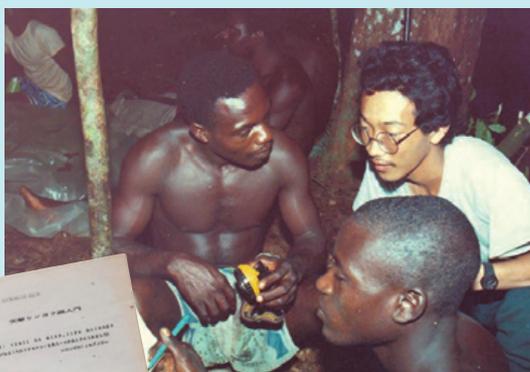
ちなみに、現在、英語を話す人は世界に15億人以上いて、その4分の3くらいは非ネイティブだそうです。となると、英語には2種類あるんじゃないか。インド人や中国人ほか、世界中の人が話す英語が数の上では“グローバル英語”であり、英米人やオーストラリア人が話す英語は、むしろ“ローカル英語”ではないかと。そう考えると、私たち日本人は、ネイティブの英語にこだわる理由がないと思うんです。友人のインド人やシンガポール人がよく「日本人はなぜアメリカ人やイギリス人の英語講師にこだわるのか」とこぼしていますが、他の言語はともかく、英語に関しては非ネイティブに習ってもいいと思います。

大切なのは伝えること。 だから固有名詞が大事

話を戻します。「親しくなる」という点でも、実用的という点でも、語学を学ぶ際、私が最も重要だと考えているのは固有名詞です。知らない土地に行って何が問題になるかという土地名や人名、店名や食べ物の名前だと思います。有名な例だとマクドナルドの発音ですよね。誰もが知る店なのに、音が拾えないばかりに、何を話してるのか理解できない。

高野さんの印象に残る言語

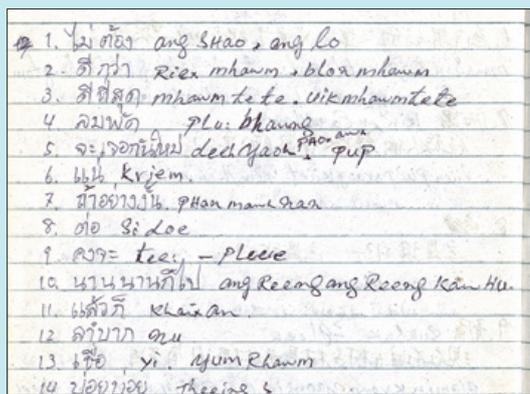
リンガラ語 (コンゴ)



高野さん自作の14ページからなる『突撃リンガラ語入門』。読み返すと今も30年以上前の記憶が蘇るとか。滞在先では、さらに、村の言葉であるボミタバ語まで学習。

撮影 伊豆倉守一

ワ語 (ミャンマー・ワ州)



「国家」の支配下に置かれたことのない不思議の地、ミャンマーのワ州。ここで話される言葉を、中国出身のワ人の牧師にタイ語で習っていた際の自作ノート。

ソマリ語 (ソマリア)



最も難しかった言語は、アフリカ東部で話されるソマリ語とのこと。助詞が動詞に付く変わった文法に苦戦。写真は「海賊の首都」と呼ばれるボサソで護衛兵士と。

逆に言えば、相手がマクドナルドの話をしているとわかれば、大体的内容は理解できるものです。

また、東京駅構内で外国人が「オーサカ、オーサカ」と困り顔で話していたら、99%「大阪行きの新幹線に乗りたい」と訴えているわけです。伝えたいことの核心さえ通じれば何とかなる。そのためには、まず世界的に有名な場所や人やメーカー、食品の発音練習をすべきでしょう。

モチベーションを促す “妄想語学”のすすめ

大切なのは、伝えたいことがあるかどうか。その意味で、語学で大切なのは、何のために学ぶのかというモチベーションです。私の場合、「コンゴで幻の怪獣を探すため」とか「ソマリアの海賊の実態を知るため」といった明確な目的があるため、必死です。

けれど、学校の授業にはそれがありません。また、教科書に掲載された一般化された文章には、誰に対して何のために話すのか、という視点が抜け落ちがちです。普通、言葉を使う際は、町を歩きながらとか、ご飯を食べながらといったシチュエーションがあるわけで、何を話題にしているかなんとなく理解できます。ところが座学では頭の中だけで学ぶため、それができない。学校の授業というのはいちばん難易度が高いんです。

言語を学ぶということは、情景が浮かぶこと、または体で感じることです。リングラ語で会話の練習をしているときなどは、彼方の存

在だったアフリカが体の中に入ってくる気がしました。

今はICT機器の普及で動画を見ながら学ぶことも増えているでしょう。私なら、そうした機器を活用し、生徒ごとに架空の設定をつってもらいロールプレイングするような授業を試してみたいです。いわば“妄想語学”。「ハリウッドに住みセレブ生活をしたい」という妄想であれば、物件探しから始めないといけません。現地の不動産サイトを閲覧すると、驚くほど高額な家賃相場がわかります。そうやって楽しみながら学ぶわけです。

試しに私も、「義姉夫婦が住むシドニーでひと月居候する」というリアルな設定で妄想したところ、多くの気づきがありました。料理ぐらいいは手伝わねば、と思い地図サイトで食料品店を探すと、近所に大きなスーパーのチェーンが5つあることがわかりました。それらを地元の人がどう発音するかもチェックします。YouTubeで買い物動画を視聴すると各店舗の品揃えも把握できましたし、棚から商品を手取る動作について、takeでもgetでもなく、grabという動詞を使うことも知りました。国によって言い方は違うかもしれません。でも、いいんです。なぜならシドニーで暮らす妄想をしているんだから。そうこうしているうち、私は今、とっってもシドニーに行きたい気分になっています。

高校生に「将来、英語を使って何がしたい?」と聞いても、明確な答えが返ってくることは少ないでしょう。考えたことがないし、言語化もしてこなかったからです。なので妄想で

いいから行動に移すと、だんだん「本当にやったら面白そうだな」となるんじゃないか。あるいは友人の妄想を知ることで、実はハリウッドセレブとかどうでもよくて、外国のアニメオタクと友達になりたいという欲求に気づくかもしれません。そうしたことが、語学学習に対するモチベーション形成の一助になれば、と思っています。

エンジニアリング的学習と ブリコラージュ的学習

ブリコラージュという言葉をご存知でしょうか。フランスの文化人類学者レヴィ=ストロースが唱えた概念で、あり合わせの材料を使い、その場しのぎの手探りでモノを作ることです。

その対立概念がエンジニアリングで、決められた材料や道具を用い、定められた手順に従ってモノを完成させることです。

学校で行われる積み上げ式の語学教育が“エンジニアリング的学習”だとすれば、私のしてきたのは、まさに“ブリコラージュ的学習”。身近にいるネイティブを捕まえてひたすらモノマネするなど、今できる方法をフル活用して学び、しかも覚えるフレーズは「その謎の魚を見たら謝礼をあげるので連絡ください」とか、「身代金の相場はいくらですか」といった取材に直結したものばかり。そして、目的を果たすと、いつの間にか忘れてしまうものだからです。

そうした学習法があってもいいのではないかな。あるいはエンジニアリング的学習との組み合わせが有効ではないか。その時々目的に応じて臨機応変に変えられるのがブリコ

ラージュの強み。変化の激しい時代にこそ求められるのではと思います。

もちろん、体系的な学習が必要なことは言うまでもありません。特に、日本の英語教育においては、「読む」もしくは「書く」に関して、かなりの力が養われることが知られています。そうしたベースがあって学び始める英会話と、なしのそれでは雲泥の差。「聞く」「話す」についても一気に伸びていくはずです。

思うに、語学ほど努力が結果に結びつく学問はありません。そして、できないと思い込んでいたことが、できるようになる感覚は人間として、この上ない喜びのはずです。高校生にとっての語学って義務感の塊かもしれませんが、面白いものだという事は知ってほしい。外国の人に食事をふるまったとき、deliciousやgoodよりも、「オイシイ」と言ってくれたら嬉しいですね。自分たちを受け入れてくれた感覚にもなるでしょう。それと同じことを相手にするだけです。今、日本に多くの外国人がいて、なかには怖そうに見える人もいます。そういう人たちに、相手の国の言葉で挨拶するだけで、パッと顔が明るくなり、仲良くなれる。それは驚くべきことなんです。語学は、人の心を開く魔法の剣だと思います。

語学の天才まで1億光年 (集英社インターナショナル)

英語、仏語、スペイン語、タイ語から、ケシ栽培の取材で滞在したミャンマー・ワ州のワ語まで、著者特有の言語観・語学観が満載。20代までの語学遍歴を綴った青春記でもある。コロナ禍で辺境取材ができない時期に執筆した入魂の一冊。



Case Study

生徒の 未来につながる 「言葉」を育てる 高校事例

英語を中心とした外国語に関する学科や、国際関係に関する学科を設置している高校は少なくありません。学校設定科目などを通じて、各学校で取り組んでいる独自の外国語教育について、背景や目的、生徒たちの「言葉」との向き合い方や成長について取材しました。

身近なことから世界の時事問題まで 幅広い外国語教育で生徒の視野を広げる

坂戸高校（埼玉・県立）

学校データ

1971年創立／普通科・外国語科／生徒数1056名（男子530名、女子526名）、
1992年に外国語科を設置以来、普通科も含め多様な国際交流事業を行うなど、国際理解教育に力を入れている。

実用的な英語を使う機会を 多様に設ける外国語科

埼玉県内に8校ある外国語科を有する公立高校の1つである坂戸高校。目指す学校像として「文武に秀で、地域に愛され、国際感覚を持つ社会のリーダーを育てる学校」を掲げる同校では、外国語科だけでなく普通科も含めた全校で、国際理解教育に力を入れている。外国語科の設置は1992年。各学年に1クラスのため3年間クラス替えない。

「生徒同士や生徒と教員の関係性が密にな

るので『お互いに思いやりをもって過ごそう』と生徒たちに言っています。そのことで、発言しやすい安心・安全な環境が育まれていきます」(国際理解教育部主任・堀江舞衣先生)

外国語科では、英語の基礎的な4技能5領域の習得はもちろん、第2外国語として英語以外の言語を学んだり、[図1](#)のようなさまざまな専門科目で実用的に語学を学んでいる。

「生徒たちには“英語を”学ぶだけではなく、“英語で”多様なことができる力をつけてほしいと考えています。語学系や国際関係学部に進学する生徒が多いですが、看護や福祉、教育など進

図1 外国語科の専門科目

科目	1年生	2年生	3年生	内容
総合英語I～Ⅲ	●	●	●	4技能を段階的に学習
ディベート・ディスカッションI	●			論理的思考力を養い、英語で議論を行う
アカデミックイングリッシュI・II		●	●	発表ややりとりを通じて実践的に英語を学び、最終的に卒業論文執筆およびプレゼンを行う
異文化コミュニケーション		●		世界の文化・社会・価値観などを英語で学び、ディスカッションなどを通じて考えを深める
グローバルスタディーズ			●	ニュースや新聞を通じて、世界で起こっているさまざまな時事問題を英語で学び、高度な英語力を身につける
第2外国語		●	●	中国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語のいずれかを選択

路選択はさまざまです。海外のニュースなどを授業のリソースとすることが多いため、生徒たちの視野が広がっていくようです。授業が生徒たちのやりたいことを見つけるきっかけづくりになっているのです」(外国語科長・前田英之先生)

生徒の視野を広げるための科目の1つが2年生の「異文化コミュニケーション」だ。世界の文化・社会・価値観などを英語で学んでいく。

「他文化を知るには自文化を理解する必要がありますと考えています。異文化コミュニケーションの授業では、まず自分自身について英語で考え、アイデンティティーを知ることから始めます。例えば、Step to the lineゲームという、さまざまな質問に答えていくゲームを通じて、自分と他の人の考え方の違いを知り、身のまわりにある他文化を探することで、偏見をもたずに他者を見ることを楽しく学んでいきます」(英語科教科主任・嶋津昌樹先生)

アウトプットの機会が多く 楽しみながら生きた英語を学ぶ

外国語科には2名のALTが常駐。いつでも生の英語を試せるなど、学んだことのアウトプッ

トの機会を多く設けている。

3年生の「グローバルスタディーズ」の授業では、英字新聞や英語ニュースなどリアルな素材を用いてコンテンツベースで世界の時事問題にアプローチする。学んだことをアウトプットするために、生徒たちが自分で関心をもった題材でオリジナルのニュース原稿を作り、キャスターになりきって英語ニュース番組風の動画を撮影して発表している。内容はフィクションでも良いとしており、生徒たちが楽しんで英語を使っている様子が映像からうかがえる。

授業で身につけたことは、学校内外のスピーチコンテストや英作文コンテスト、ディベートコンテストなどへ出場することで、さらに磨きをかけている。

3年間の集大成としての 英語の卒業論文

スピーキングやライティングの力を系統的・総合的に養うための授業が1年生の「ディベート・ディスカッションI」と、2・3年生の「アカデミックイングリッシュI・II」だ。クラスをチーム分けして少人数制で「書いては話す」を繰り返していく。

1年生ではプレゼンテーションや自分たちでストーリーから作る英語劇を通じて、論理的な思考や自分の思いを伝える表現力を身につける。2年生では社会問題などをテーマに自分の意見の発表やディベートを行う。その集大成が3年生の卒業論文だ。自分の関心事をテーマに英語で論文にまとめ、さらにプレゼンシートも作



写真左から、廣瀬純一教頭、国際理解教育部主任・堀江舞衣先生、英語科教科主任・嶋津昌樹先生、外国語科長・前田英之先生

成してクラスの前でプレゼンと質疑応答を行う。

「生徒たちは3年間の多様な専門科目を通じて、英語の表現方法など技能から、世界にあふれる社会課題まで、たくさんのことを吸収していきます。その吸収した成果を自分の考えという形で発信する場が卒業論文なのです」(堀江先生)

「外国語科の卒業論文とは別に、総合的な探究の時間でも研究・発表を行っています。外国語科の生徒たちは日本語での発表の組み立てもうまいです。日頃から考えを言語化してまとめる学びが多いため、日本語能力も相乗的に上がっていくと感じています」(嶋津先生)

全校生徒を対象に、多様な国際理解教育を実施

坂戸高校では、外国語科だけでなく普通科の生徒も含めた全生徒の国際感覚を養うために、オーストラリア研修や、外部講師を招いてのグローバルセミナーなど、さまざまな国際交流事業を行っている。

オーストラリア研修はホームステイしながら現地の学校の体験授業を受ける。コロナ禍で停止していたが今年度から再開し、希望者対象で今年は25名の生徒が7月に2週間渡豪する予定だ。外国語科からだけでなく普通科からも応募があった。

グローバルセミナーでは外務省やEU、JICAなどから講師を招き、世界の現状についての話を聞く。

「世界情勢を知り視野が広がる体験は、進路

図2 外国語科の学校設定科目の取組の一部

アカデミックイングリッシュ

論理的な思考を身につけ、自分の考えを英語で話したり書いたりする表現力を身につけ、3年生で卒業論文を書いて発表する。



1年生は「ディベート・ディスカッション」で、自作のストーリーの英語劇などを実践。

卒業論文のプレゼン。質問する側も英語なので、仲間の発表を理解し発信する力が求められる。



卒業論文は冊子にまとめられる。テーマは環境問題から、癒しの方法など多岐にわたる。



アカデミックイングリッシュ

3年生の「グローバルスタディーズ」ではCNNの教材などを使って世界の時事問題をリスニング、リーディングで学び、学んだ内容をディスカッションして自分の意見をまとめる。最終的に、自分たちでオリジナルのニュース動画を作成する。

自分たちで作成した英語のニュース原稿を、キャスターになりきって話す動画を作成。



ニュース映像には英語での街頭インタビューなども盛り込むなど、生徒たちの工夫が見られる。

選択の幅を広げるので、普通科の生徒たちにも必要です。世界に通じているさまざまな大人の話が聞けるように、講師選択は我々教員がアンテナを張って探し、直接依頼をしています」(堀江先生)

身につけた思考力や発信力で よりよい世界を創れる人材に

教室の内外で多角的に学んでいる外国語科の生徒たちは、語学力だけでなく、思考力や積極性など自身の成長を実感している(左記参照)。

「外国語科に来る生徒が必ずしも英語が好きで得意とは限りません。しかし、『英語を話せるようになりたい』と志をもって入学した生徒たちが楽しみながら、自信がもてるようになる授業を目指してきました」(嶋津先生)

例えば、リーディングの教科書で扱っているトピックは難しい題材が多いことから、最初は生徒にとって身近なスマホやSNS、マンガなどの話題から入る。すると自分の興味があることを英語で伝えたいという気持ちがわき上がり、生徒たちは自ら学ぶようになってくる。

「我々英語教員は英語が好きなので、つい難しいところから入ろうとしてしまいますが、生徒の興味とは違うことをいつも肝に銘じています」(嶋津先生)

「AIで翻訳が簡単な時代に学校で英語を学ぶ意味は、『伝わった』経験で次のことにチャレンジしたくなる意欲を育てられることだと思いま

す」(堀江先生)

「英語さえできればよいわけではありません。生徒たちの主体性や学びに向かう力も育てたい。カリキュラムは緻密に組み立てつつ、授業では教員があまり口出しせずに生徒の自主性に任せています。ただし、生徒の小さな変化を見逃さず、スイッチを入れるタイミングだけは外さないようにしています」(前田先生)

外国語を学ぶことで、生徒たちにどんな成長があり、今後どんな人材を送り出したいか、教頭の廣瀬純一先生はこう締めくくった。

「1つの外国語を学ぶことで、世界を見る窓が1つ増えます。窓が増えることで昨日まで見えていた景色が変わり、視点が増えた生徒たちは発想が変わっていきます。こうした若者たちが新しいことを創りだし、世の中に変化を起こしてくれることを期待しています」

図3 国際理解教育の取組



昨年度のグローバルセミナーでは、学習院大学の富田祐一教授を招き、海外の大学での経験や英語学習の意義について語っていただいた。

30年前から実施しているオーストラリア研修。ホームステイしながら異文化を生で体験(写真は2019年度の活動)。



\ Students' Voice /



2年生
新井聡馬さん

言語だけでなく新しい価値観に触れられ、成長の機会が多い！

本当は英語が苦手。それでも、外国語科に入ったのは、海外企業との仕事をしている父や叔父から「通訳を通すとうまく伝わらないこともある。自分で英語を話せた方がいい」と、日頃から聞いていたためです。それで英語をがんばろうと思いました。

がんばりたい気持ちはあるものの、もともと苦手なので、語彙を増やすために単語を覚えたりするのは大変です。でも、ALTの先生と会話して、覚えた単語を使って自分の言いたいことが伝わったときは、本当に嬉しいです。

将来はペットの看護関連の仕事につきたいと考えているのですが、ペットに関する文化や法制度、教育などは欧米の方が進んでいます。自分がそうしたペット先進国で学んで、日本に知識を還元したい気持ちがあり、そのためにも英語をもっとがんばりたいです。

うちの科は異文化について学ぶ授業が多く、今まで知らなかった価値観や文化に触れることができます。また発表の場も多様にあることで、内向的だった自分が、街で会った知らない外国人の方と会話できるほど積極性が身につきました。3年間クラス替えがないため、お互いを思いやりながら共に成長していきます。そうした成長の機会に恵まれた環境が気に入っています！



3年生
早坂百代さん

英語を話すために日本語の表現も考え、思考の幅が広がった

中学生のころから将来は英語教員になりたいと思い、英語教育に力をいれている本校の外国語科に入学しました。

ALTの先生とコミュニケーションを取る形式の授業が多く、トピックに添って自分の意見を書いたり、自分でストーリーを考えたオリジナルの英語劇を演じたり、4技能を満遍なく伸ばすことができていると思います。英語に関わらない日はないくらい、英語に触れる機会が多いことが一番のメリットです。土日は家で洋楽を聴いて、歌詞の意味を考えたりしています。

第2外国語はスペイン語を選択。みんながワイワイしていて、発言や質問がしやすい雰囲気が入りました。複数の言語を身につけられれば、たくさんの国の人とコミュニケーションできるようになれそうで嬉しいです。

外国語科に入って、英語力だけでなく、コミュニケーション力が上がったと感じています。英語が話せるようになるにつれ、伝えたいことがたくさん出てきました。英語を話すときに、まず「日本語ではどう表現するか？」を頭の中で考えるようになり、日本語の会話のバリエーションや思考の幅も広がってきたのです。そのことで、英語以外でも人と会話することが楽しく、コミュニケーション力の向上につながったのではないかと思います。

海外からの移住者や観光客が多い地域でリアルなコミュニケーションができる英語を習得

白馬高校（長野・県立）

学校データ

1951年創立／普通科・国際観光科／生徒数136名(男子70名、女子66名)、多数のオリンピックを輩出するスキー部を有し、国際観光科は日本全国から生徒が集まる。コミュニティ・スクールとして地域から多方面で篤い支援を受けている。

観光資源を学びに変える 地域と共にある学校づくり

白馬高校のある白馬村は、スキーや登山で国内はもとより海外からも人気を集める国内有数の観光地だ。この地域の環境に魅力を感じて移住した外国人は村の人口の1割を占める。同校に国際観光科ができたのは2016年。背景には生徒数の減少があった。

白馬、小谷両村は「白馬高校を育てる懇話会」での議論を経て、県教育委員会に対し「白馬高校の経営・運営に参加する地域案」を提出。県教委の検討・審議の結果、全国から生徒を募集する国際観光科の新設が決まった。これに合わせて、長野県初となる学校運営協議会も設置され、県・県教委・地域が連携して学校の支援を行う、新生白馬高校が誕生した。

同校が目指すのは、「多様な文化や環境に触れ、地域への理解と愛着を深めるなかで、自身や地域の未来を創造できる生徒の育成」であり、観光と英語を軸としながら幅広い学びに取り組みめるカリキュラムを意識しているという。「観光の専門科を置く学校は全国にあります

が、そこでの学びは①ホテルなど観光業での実務を学ぶ、②観光事業のマネジメントや政策を学ぶ、③地域の観光資源やその魅力化について学ぶ、の3つに大別されます。本校ではどれも学べますが、主に目指すのは③で、地域を多角的かつ深く理解し、持続可能なまちづくりを考える取組を通して自己実現を図ることを狙っています」(国際観光科主任・浅井勝巳先生)

卒業後は大学へ進学する生徒が多く、学部も多岐にわたっている。

「全国から集まる生徒のための寮は村が出資・運営し、学校と協力して生徒支援にあたっています。授業や課外活動で地域の皆さんが講師や活動場所の提供等で積極的に支援くださることで教育活動の幅が広がり、生徒の育成にもつながっています」(藤森 要教頭)

地元の魅力を実践的に伝える 英語ガイドツアー実習

国際観光科では、学校設定教科「観光」に、「北アルプス学」(1年)「観光実務」(2年)、「観光まちづくり」(3年)といった特色ある学校設定科目を置き、地域の特性、観光産業の仕組

み、観光政策について学んでいる。英語でも地域環境を活かした多様な学校設定科目を設置している。

「英語でコミュニケーションを図りたいという生徒のニーズにあわせて、対話に力を入れた授業を展開しています」(浅井先生)

特徴的な科目が2年生の「観光英語」(旧課程「観光コミュニケーション英語」)だ。観光に特化した英語表現やホスピタリティについて実践的に学習する科目で、なかでも生徒による英語ガイドツアーが目玉となっている。

まず事前学習として、白馬地域で観光ガイドを務めている外国人ガイドを招いて、プロの仕事を体感。その後、生徒自らツアーの流れとガイドの内容を立案し、白馬・小谷在住の外国人をゲストに模擬ツアーガイドの実践に取り組む。ツアー中にはゲストから想定外の質問も出るが、仲間と協力してその場で調べて説明を乗り切っていく。

体験した生徒たちは、「会話の内容は理解して答えられたし、アイコンタクトもできたが、次は



写真左から、国際観光科主任・浅井勝巳先生、藤森 要教頭

もっと表情を意識して会話を継続させたい」、「知っている単語を並べただけではゲストに伝わらないこともあった。文法もしっかり学びたい」など、気づいた課題を次の学びにつなげる意欲をみせている。

外部の人々との関わりで コミュニケーション意欲が高まる

英語ガイドツアーに限らず、白馬在住の外国人が学校の取組に協力してくれる場面は多い。また、バスターミナルやカフェを訪れた外国人にインタビューする活動も行っている。

「観光客の滞在期間を知るために、近隣のスキー場でアンケート実習をしました。対象は日本人観光客でも良かったのですが、生徒たちは果敢に外国人観光客に尋ねに行っていて、『外国人は短くても2週間、平均で1カ月も滞在している!』と、日本人観光客との違いに気づいて帰ってきました。コロナ禍で外部の人との交流が減ったことで、生徒たちも内向的になりつつあったので、人との関わりが生徒たちにとっていかに大事かを痛感しています」(浅井先生)

コロナ禍で止まっていた語学研修や海外との交流が昨年度から再開。日本に居ながらにして英国風の雰囲気と英語コミュニケーションを満喫できる、福島県のブリティッシュヒルズでの語学研修は昨年6月に実施。今年は学校を訪れたシンガポールの高校生たちとSDGsについての話し合いやお互いの伝統文化について紹介し合う交流を行った。今年度末には希

ブリティッシュヒルズでの語学研修



希望者を対象に、福島県の滞在型語学研修施設であるブリティッシュヒルズで、2泊3日で英語漬けの生活を送る。



座学での英語の授業のほかに、英語でレクチャーを受けながら実際にお菓子を作ってみるなど、体験型で楽しく学んだ。

シンガポールの高校生徒との交流



シンガポールのPeikai Secondary Schoolの生徒19名が今年の5月に来校。

白馬高校が2020年に実施した「断熱プロジェクト」をもとに、持続可能な環境に関して共に学んだ。



体験交流では、グループに分かれて日本の伝統的な遊びであるけん玉やコマ、弓道、ボルダリングと一緒に体験。

望者による海外短期研修も再開する予定だ。

学校の外に出ることで地域の想いを受けとめる

外部との交流を含む多様なカリキュラムを通して、生徒たちの進路選択の幅も広がっていく。海外で学んでみたいという生徒も増加傾向だともいう。

「実習などで触れ合う外国人定住者の皆さんが日本で仕事や生活をする姿を見て、自分も海外で活躍できるかもしれないという発想が広がっています。留学した先輩の体験談も役に立ちますが、それ以上に身近にいる外国人の方の話に実感がわくようです」(浅井先生)

生徒たちの学びを保障する地域の支えも強力だ。生徒たちの語学研修費用の一部(最大20万円)を補助する制度のほか、英語検定などの受験料補助の制度も充実している。さらには、同校での学びを将来、村に還元してくれることを期待し、大学卒業後Uターンして村内の観光関連の仕事に就いた場合に、大学等在学中に受けた奨学金を最大100万円補助する

「白馬村ふるさと人材奨学金返還補助事業」を実施している。

「こうした手厚い事業があっても、生徒たちは初めから地域からの期待を意識しているわけではありません。ところが、学校から一歩出て、授業実習や課外活動で地域の皆さんと交流する

機会を重ねることで、いかに白馬高校の生徒が地域から応援されているかを実感し、それによって地域への見方も変わっていきます。私たち教員は、そうした地域と生徒との橋渡し役としてこれからも活動を続けていきたいと思っています」(浅井先生)

英語ガイドツアーの取組

事前学習



秋に実践する英語ガイドツアー実習に向けて、事前学習として日本で長期間活躍するプロの外国人観光ガイドを招き、英語ガイドの実際を学ぶ。

英語ガイドツアーの実践



現3年生が2年次に行った「観光コミュニケーション英語」の授業での様子。集合時から実践は始まりバス乗車中のガイドもこなす。

ゲスト役からの予想外の鋭い質問にもその場で調べるなど、生徒たちは自分たちのできることを模索して対応していた。



白馬驛のオプションツアーの目的地として人気が高い、地獄谷野猿公苑と小布施、善光寺を回った。

14カ国にルーツをもつ生徒たちが集い 毎日が留学のように異文化を体感する

飯野高校（三重・県立）

学校データ

1974年創立／応用デザイン科・英語コミュニケーション科／生徒数457名(男子107名、女子350名)、1987年に設置された英語科を1999年に英語コミュニケーション科に改編。海外にルーツのある生徒を多数受け入れている。

三重県内の外国籍高校生が 集まってくる飯野高校

飯野高校の全日制は、応用デザイン科と英語コミュニケーション科からなる。1999年に英語科から改編した英語コミュニケーション科は、当初は日本人生徒が英語を専門的に学ぶ科であった。しかし、三重県内の外国人居住者の増加にともない、同校で外国籍の生徒を積極的に受け入れるようになり、県内の各地から南米やアジアを中心とする外国籍の生徒が集まり始め、2008年に外国人生徒等教育のための加配教員が配置されるようになった。

同校では外国人生徒等をCLD生徒

(Culturally Linguistically Diverse=文化的言語的に多様な背景をもつ生徒)と呼んでいる。CLD生徒の多くが英語コミュニケーション科に在籍。英語コミュニケーション科では日本人生徒を含め14カ国にルーツをもつ多国籍の生徒が日々共に学んでいるのだ。

「日本語がまったくわからないCLD生徒もいるため、『お互いを助け合おう』と生徒たちにはいつも話しています。特に日本人の生徒には、日本語で話すときは易しい言葉を使うようお願いしています」(英語コミュニケーション科主任・桑内直美先生)

CLD生徒たちのために、外国人生徒支援専門員が常勤し、スペイン語とポルトガル語で授業サポートや通訳補助を行っている。また学校設定教科「国際」のなかに学校設定科目「日本語基礎A」などを設置。日本語で教科学習が困難な生徒には、国語、社会、理科、保健の取り出し授業も実施している。

「違っていても当たり前」で 生徒みんなの居場所ができる

日本人の生徒にとって英語コミュニケーショ



(写真左)さまざまなルーツをもつCLDの生徒たちと日本人の生徒たちが、「普通に」混ざり合い、オープンに学び合っている。(写真右)お互いの母語を教え合うことが日常茶飯事。楽しみながら複数の言語が身についていく。

ン科のクラスは「毎日が留学状態」と、糸内先生は語る。「“異文化”“多文化”と言うまでもなく“違うことが当たり前”。国籍だとか何語を話すかは重要ではなく、個人としてお互いを見えています」(糸内先生)

母語が異なるため、最初は身振り手振りが中心だが、生徒たちは自然と助け合ってさまざまな言語を交えながらクラスメートとコミュニケーションをとっていく。

「日本人の生徒はわからないと先に進めない子が多いのですが、CLDの生徒たちはわからないことを恥ずかしながらに隠さず伝えてきます。その姿を見て日本人の生徒たちが『わからないと言っていいんだ』と気づき、ありのままの自分を出せるようになっていきます」(丸山竜司教頭)

お互いのありのままを受け入れる環境に、多くの生徒が居心地の良さを感じるようになる。中学まで不登校だった生徒が自分の居場所を見つけて毎日登校するようになったり、入学当初はCLD生徒と馴染めなかった日本人生徒が、「違う」ことを気にしなくなり、サポートする側に変わっていったりもする。

CLD生徒たちに影響を受けるのは日本人生徒だけではない。教員も変わっていくという。

「日本語も英語も理解できない生徒にどう伝えていいか迷ったときに、以前は『教員だからわからないとは言えない』と思っていました。でも生徒たちを見て正直に言ってもいいと思えるようになり、『先生もわからないから』と、ネイティブの生徒に頼るなど、生徒たちとフラットに学び合え



写真左から、今高成則校長、英語コミュニケーション科主任・糸内直美先生、英語科・橋谷優希先生、丸山竜司教頭

ようになりました。本校の教員は上から引っ張るのでなく、身近にいる大人の一人として生徒に接しています」(英語科・橋谷優希先生)

英語科の先生だけでなく、数学科の先生が、ポルトガル語の数字の読み方を覚えるなど、工夫しながら生徒たちと寄り添う方法を模索し、自身を変える努力をする。教員が変わることで、授業中に下を向いていた生徒たちが顔を上げるようになっていく。

「顔を上げさせたら教員の勝ちなんです。そこから授業はスムーズになります」(丸山教頭)

英語で自分の考えを スピーチできる力をつける

英語コミュニケーション科では①英検2級・準1級以上を取得する、②英語を使って行動、スピーチ、プレゼンテーションができる、③卒業してからも、自ら英語学習ができる、の3つを目標とし、さまざまな専門科目の授業を実施している。英語の基礎を学ぶ総合英語、英語で自己

表現をするエッセイライティング、ニュースや新聞記事などを理解し論点整理するアドバンスライティング、ディベート・ディスカッションなどの授業を経て、4技能をバランスよく身につける。3年生の英語表現演習では、全員が自分で見つけたテーマについて英文で書き、プレゼンテーション型スピーチと説得型スピーチの発表を行う。そこで代表となった生徒は市民会館のホールで発表を行うことが科のゴールだ。

英語関連の行事も豊富で、ALTと英語でコミュニケーション活動をしたり、プレゼンテーションを学ぶサマーセミナーや、英語のスペシャリストによる講演やワークショップなどを実施。校外のスピーチコンテストに参加し高い実績をあげる生徒も多い。

多言語を駆使できる人材の存在を社会に広めていきたい

日本人の生徒の多くが卒業後に大学や専門学校に進学、あるいは正社員として就職することに対し、CLDの生徒たちは進路が不安定な傾向にある。高い英語力があっても進学先で日本語での授業についていくことが難しいことや、働くことに対する考え方の違いから非正規雇用を希望する生徒も少なくない。その結果、本人の希望とは別に帰国する卒業生もいる。一方で、母語・日本語・英語の3カ国語が使える、ワールドワイドなパイプ役として即戦力となる人材としての期待が地域社会に知られていない課題がある。



飯野高校の特徴を知ってもらう地域活動として、近隣の小学校でさまざまな言語の出張授業を行っている。



「飯野リトルワールド」と称し、チーム分けしたグループに属する生徒たちの母語で、1つの単語を表現して発表。



市民会館のホールでの英語表現演習発表会。英語コミュニケーション科の代表が、全校生徒の前でスピーチを行う。

「CLDの生徒たちが長く日本で暮らせるために、地域の企業に生徒たちの存在や能力を知ってもらえれば進路選択の幅がもっと広がります。そのために、生徒と地域社会の人が交流できる場を一層増やしていかなければならないと

考えています。そして生徒たちには、学校で養った垣根のない感覚を活かし、インクルーシブな社会を実現していける人材になってほしいと願っています」(糸内先生)

Students' Voice



2年生
ウイハラ
エリケーワラさん

英語を身につけて、イギリスの
大学で獣医学を学びたい

父の仕事の関係で2年前にスリランカから来ました。日本はクリーンで人々が礼儀正しくて大好きです。日本に来たときは日本語がまったく話せずコミュニケーションをとるのが大変でしたが、飯野高校では日本語と英語が学べて、さまざまな国から来た友達がいるので、いろいろな言葉で話せるのが楽しいです。先生たちがとても親切で、困ったときにいつも助けてくれるので学びやすい学校です。

自分にとっては日本語も英語も外国語。日本語は覚えなければならない文字が多く、漢字が難しいので英語の方が得意。将来は獣医になりたいので、生物学や獣医学を学べる大学に進学したいです。でも、日本語での受験は難しいので、英語の勉強をがんばって、イギリスの大学を目指しています。



1年生
吉川 心さん

自分と考え方の違う人を
理解できる人間になりたい

英語コミュニケーション科を目指したのは、『VOGUE』というアメリカの雑誌が好きで、海外で活躍する編集者になりたいと思ったからです。『VOGUE』はファッションだけでなく、LGBTQをはじめ、多様な考え方の人についてとりあげているのが魅力。私は自分とは違う考え方の人を理解できる人間になりたいと思っていますからです。本校にはいろいろな国のルーツをもつ友達がいるので、とてもいい環境です。多国籍の言葉話すクラスメートと一緒に学び、知らなかった文化にも触れられて、毎日が楽しいです。「自分から英語で話してみよう」と、日々挑戦することの繰り返しで、1つできるようになるとまた次の目標が出てきます。挑戦の繰り返しを体験することで、将来の夢もよりはっきりしてきた気がします。